
COBALT-SERIES
前田珠子
天女の舟
2
集英社



COBALT-SERIES

天を支える者2

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

天を支える者2

前田珠子

集英社

目　次

天を支える者2

天を支える者2 …… 7

あとがき …… 184



主要登場人物紹介


スカー
ユーカリィヤ

イラスト／明咲トウル

天を支える者2

8

城砦都市としても名高いロスタロイドのほぼ中心に聳え立つ華麗にして堅固なる、砦の中の砦――ディエーン王宮。

広大な敷地の周囲に張りめぐらされた深く広い堀や、つかみ所のない城壁の持つ意味は、気づかずにいたころには気づかずにいられたさりげなさで、けれど気づいてしまったら意識せずにはいられぬ存在感をかもし出していた。

（大変なことになっちゃったわぁぁ！）

その王宮に向かう馬車に揺られながら、ナルレイシアは唇を噛みしめていた。

本当に、大変なことになってしまったのである。

田舎生まれの田舎育ちの身で、しかも貴族ですらない平民の身。

よもやまさか、王宮に足を踏み入れることになろうとは、彼女はこれまで一度だって想像したことすらなかった。

まさに青天の霹靂である。

だのに、なぜ、こんなことになってしまったのかといえば……。

故郷のフィレアで思いがけない災難に見舞われ――我が身の貞操は守ったものの――悪意をもってたてられた噂のせいで、故郷にいられなくなったのが、そもそもの始まり。

自宅の裏山に住む隠者にして恩師である老人の紹介で、このロスタロイドに働き口を見つけやってきて――遠方地を選び、事情をよくよく説明すれば、わかってくれるひともいるはずだから、わざわざ苦労するために働きに出る必要はないと主張する父親を説得して……だって、そんなの、だましたようなものではないか……そうして。

旅の途中でいくらか（？）の不都合はあったものの、なんとかたどり着き、温情溢れる女主人を見知ってしまったいま、これはもう悪夢にも等しい。

（ああぁ。たっぷりの書物とお優しいファティ・リンシャ……！　理想的なお屋敷だったのに……のにっ！）

しかしロスタロイドに着くなり、酔漢を装った男に、勝手に押しつけられた荷のせいで、事態は急変してしまったのだ。

（むかつくー）

というのが、現在のナルレイシアの本音である。

ナルレイシアの理想は、風変わりとは言われるかも知れないが、慎ましやかなものだった。大好きな書物に囲まれて、読書三昧の日々さえ送れればそれでいい。

そうした意味で、彼女にとって、紹介された雇用主――ファティ・リンシャの屋敷での生活は理想的ですらあったのだ。

ファティ・リンシャの屋敷の書庫で、傷んだ書物は補修したり、自分の手に負えない書物を修理に出したり、もちろん休み時間に読んだことのない本を読む喜びほど大きなものはない。

なのに……なのに、だ！

（ああ、あの馬鹿盗人！）

いまとなっても、ナルレイシアはあの酔漢を装った男を呪わずにはいられない。

（あんたが余計なことをするものだからーっっっ！）

半分は八つ当たりなのだ。

自分でもわかってはいるのだ。

それでももし、自分がロスタロイドにたどり着いたあの夜、神具を盗んだ男と自分が、偶然接触することさえなかったら……と、そう思うとついつい恨みがましさが勝ってしまうのだ。

「そうしたら……」

言いかけて、ナルレイシアはふう、と息をつき、言葉を呑んだ。

言っても詮ないことだと、自分でもわかっているからだ。

（まあ、きっかけがなんであれ、選ばれちゃったのがわたしってことに変わりはないんだし……だったらきっと、時間の問題だったってことよね？　それでももう少しは時間かかってほしかったけど……）

深ーく息をついてしまう彼女の現在の肩書は『選定者』。

つまり世界の天地の間を支える存在――柱神の新たなるひとりを見極め選ぶ役目を担う者、だった。

選定者とはなんぞや？

文字通り、次の柱神を選ぶ者のことなのだが、これに選ばれたことが、そもそもナルレイシアにとっては青天の霹靂にも似た衝撃そのものだったのだ。

柱神――それは世界を支える支柱たる神。かつて百八人いたとされ、半分近くに減ったとはいえ……いや、だからこそ、彼らの存在にまつわる謎は深まっている。

ほんの一カ月前まで、田舎のフィレアから出たこともなかったナルレイシアが知らないこと

ばかりだったのも無理はない。

（柱神さまっていったら神さまなんだもの……。生まれた時から神さまなんだって思うの、無理ないじゃない……）

がたがたと揺れる馬車のなかで、いまさらながらにナルレイシアはそんなことを思う。

（まさか、元々は神さまなんかじゃなくて……候補が何人もいるだなんて、わたしが知ってるはずないじゃないの）

しかも、その候補となるのは人間なのだ。

柱神が元々は人間だという事実だけでも衝撃的だったというのに、まさか自分が、その候補のなかから次の柱神となるべき人物を選び出す存在だったなんて！

説明してくれた相手が黄神神殿の高位司祭でなかったら、「馬鹿な冗談やめてください！」の一言で片づけたところだ。

しかし相手は正真正銘の高位神官だし、語る口調も真剣そのものだったし、だったら嘘じゃないかも……とか思って迷って、結局この段になってしまったというわけだ。

いや、本音を言うならやばそうな雰囲気に、ちょっと腰が引けてたりして、あんまり深入りしないうちに断ってしまおうかとか考えたりもしたのだけれど。

それを思い止まったのは、「さあ、断ろう」とばかりに意気込んだ瞬間、現れた子供——の

幻――のせいだった。

突然現れた子供の姿に動揺し、目を瞠った彼女の前で、その子は「助けて」と、縋るような眼差しで告げたのだ。

さらにはそう告げるなり、消えてしまった。

あなたは誰、とも、なにから助けて欲しいの？　と問う暇もなかった。

気のせいだったのだと、思えば思えないこともなかったのだろうけれど、抜けない棘のように、その子のことが忘れられなくて、断る時期を逸した結果、現在のこの状況にある。

とはいえ、ナルレイシアの心境は複雑である。

（だってなー、わたしがなにも知らないことわかった途端、神官さまってば急に渋り出すし……スカルトードさんも信じられないって顔するし……。知ってて当然なこと知らないわたしに不信感抱くのは無理ないとはいっても、その文句はわたしじゃなくて、わたしを選んだ神聖硬貨にっつーか、虹神さまに言ってよね）

柱神が半数近くに減った暗黒時代以降に現れた『選定者』は、創世七神――すなわち虹神直々に選ばれた人間だと言われている。

その証とされるものが、鋳造された記録はあるものの、決して世に出ることはない、虹神の正面の顔が刻まれた神聖硬貨なのだ――が。

大抵そういうものは、見識のある人物のもとに現れるというか飛び込んでくるものらしいのだが、今回選ばれたのは十六歳のナルレイシアだったのだ。

（でもまあ、本来選定者って、どこにいるかもわからない次代さまを捜し歩くお役目らしいからなあ。ディエーンの場合、斎王さまは集まって住んでらっしゃるわけだから、楽と言えば楽なのよね）

少なくとも、どこにいるとも知れない相手を探すわけではないのだから。

とはいえ、それとは別の不安があるから、ナルレイシアは気楽に考えられない。

（スカルトードさんの話だと、選定者は見れば次代さまがわかるってことだけど……本当かな……はっきり言って、自信ないんだよね）

なにやらどんどん気が重くなっていく。

「いまさら、やっぱりやめます……ってわけにはいかないだろうなぁ」

つい洩らしてしまった少女に、正面に座っていた青年が微笑んだ。

「当たり前でしょう。誰がなんと言おうと、選ばれたのはあなたなのですからね。少しばかり不快な思いを味わわせてしまうかもしれませんが……恨むなら黄神さまと朱橙神さまと黄緑神さまを恨んでくださいね」

さらりと不穏で不遜なことを口にする青年――スカルトードを前に、ナルレイシアは頭を抱

えたくなった。
（こんなに綺麗でやさしそうなのに、どうしてひとの不安煽るようなことばっかり言うのかな、このひとってば!?）
だが、逃げ出そうにも時すでに遅し。
彼らを乗せた馬車は、王宮の門を通り抜けた――。

不安的中。
（やっぱりわからないーっっ！）
がんがんと痛む頭を押さえながら、ナルレイシアは紹介された五人の斎王と向き合っていた。
下は十二歳から、上は二十代半ばまで――生まれも育ちも良さそうな面々を目にするだけで、やっぱり自分が選定者に選ばれたのはなにかの間違いに違いないと思えてくる。
（スカルトードさーんっっ！　見ればわかるって、具体的にはどうわかるのか教えておいてほしかったです――っっ！）

いや、聞いていたところでいまの状況が変わるわけでもなかろうが。

スカルトードはこの部屋にはいない。国の大事なのだからと、ナルレイシアだけがここに案内されたのだ。彼が他国のひとであることは、そのとき初めて知った。

（でも、王宮に入れるってことは、身分の高いひとってことよね？　でもでも、そんな身分の高いひとが夜の歓楽街を歩いてたりするものかしら？）

後で知ったことなのだが、ナルレイシアがロスタロイド到着後昏倒したのは、下町寄りの歓楽街近くの通りだったのだ。

（身分の高いひとがたまにやるっていうお忍び行……だとか？　でも、それにしては妙になじんでたような気も……）

人間、やりたくない、だがやらなくてはならない時ほど、別のことをしたくなる。これを逃避という。

わかるはずのことがさっぱりわからず、半ば混乱しつつあるナルレイシアは、この場ではなんの役にも立たない、どうでもいいことに頭を使っていた。

（あんな風に優雅に見えて、実は遊び人だとか……？　だとしたら、あの顔の広さも納得できるけど……）

しかし人生には、逃避したくともそれが許されないとき、というものがある。

「いかがですかな？」

ディエーンにおける黄神神殿最高司祭、アラマンディが、彼女に答えを促した。

（きゃー！　やめて！　やめてってば！　追い詰めないでよ！　わかんないのに！　わかんないのに！　わかんないったらわかんないのよーっっ！）

困惑も極まり、ナルレイシアは泣きたくなってしまった。

緊張のあまり、胸がずきずき痛みだす。

（心労がたたって体の調子を崩すひとがいるって、聞いたことはあるけど、それってこういうことなのかしらん!?）

確かにこんな圧迫感を頻繁に感じていては、健康な体だって壊れてしまうに違いない……などと思いながら、現実のものとしか思えぬ痛みに、つい胸に手を当てた彼女は、その途端ふっと呼吸が楽になったことに瞠目した。

（あれ？）

そういえば、問題の指輪は、決して盗まれたりしないよう、胸元に隠しておいたのだった。

いつまた賊に襲われるかもわからなかったから、王宮から迎えが来たときも、用心して衣装の内側に縫い付けたのだ……記憶をたどって見れば。

そうして――。

指輪を縫い付けた場所に手を当ててみると……わかってくることもあって。

（そうか……そうなんだ。次代さまはこの指輪と縁で結ばれた方なんだよね。指輪がなんだかよそよそしいってことは、つまりそういうことなんだわ）

この場に指輪――『黄昏の黄金』の主はいない。

そういうことだ。

「いません」

「なんですと？」

ナルレイシアの言葉に、アラマンディが声を荒らげた。

（怖い――！　このひと！）

迫力ありすぎである。

「だって、いませんったらいません！　ここにおいでの斎王さま方のなかには、次代さまとなる……なれる方はひとりとしておいでになりません！」

決死の覚悟で叫んだ次の瞬間、ナルレイシアはさっと青ざめた。

（じゃあ、本命捜してきてとか言われたら、言われた通り捜しに行くしかないってわけ？　本人、どこにいるかもわからないってのに……？　やーだーどうしよう!?）

不幸中の幸いの権化と呼ばれる自分が旅などしようものなら、トラブルの大量発生に見舞わ

れるのは間違いないではないか。

フィレアからロスタロイドに来るだけでも、嵐に遠回りに馬車の脱輪と、アクシデントの嵐だったというのに……先の見えない旅など、恐ろしすぎるというものだ。

怖い、困る、どうしよう――三つの言葉が脳裏を埋めつくす。

そんな彼女の耳に、初めて聞く声が飛び込んできたのは次の刹那のこと――。

「もういいだろう？　三神に選ばれた選定者を試すような真似は感心しないと言っておいたはずだよ、わたしは」

低い、穏やかそうな男性の声だった。

そちらを振り返ったナルレイシアは、衝立の後ろから現れた人物を目にするなり、場所も状況も一瞬忘れてぽかんと口を開けてしまった。

そのひとの髪は黒く、やさしげな瞳は灰色――年の頃は三十四、五といったところか。

中肉中背の、絶世の美貌を誇るわけでもない、普通の……いや、普通よりはずいぶん上品そうだけれど、決して我を忘れて見とれるような容姿の主ではなかった。

なのに、ナルレイシアは目が放せなかった。そのひとの纏う、人間では決してあり得ない神気ゆえに。

（こ、このひと……いいえ、この方は、まさか……）

彼女の疑問に気づいたわけでもあるまいが、アラマンディがそのひとの名を口にした。
「アマンシールさま」
アマンシール――この名を知らないディエーンの民はいない。
天と地との間の『空』を支えるディエーンの守護者――。
(ひえーっっっ！　本物の柱神さまだぁぁっっ！)
パニックを起こしかけたナルレイシアに、アマンシールはそれはそれはやさしそうな笑顔を向け――そうして、聞き捨てならないことを口にした。
「試したりして悪いことをしたね。だが、これで皆も、君が間違いなく神に選ばれた選定者だと納得してくれるだろう。君が見抜いた通り、この場には次代の候補者はひとりとしていないのだからね」
(え、と。それってつまり……？)
「わたし、騙されたってことですか？」
「いいや」
「それは違う」
と、アマンシールとアラマンディがほとんど同時に声を上げた。
「君のように年若いお嬢さんが選定者に選ばれたことも、複数の神聖硬貨が集った選定者とい



うのも前例がなくてね。彼らはつい杞憂を抱いてしまったんだよ。本当にすまなかったね。どうか悪く思わないでおくれ」

神々しさ全開のアマンシールに笑顔で謝られては、ナルレイシアとしても怒るに怒れなかった。

しかし、時間の経過とともに、冷静さを取り戻した彼女がたどりついた結論は。

（前例だかなんだか知らないけど、アラマンディさまたちにしてみると、わたしってば二重の掟破りの存在で、だから騙されて試験受けさせられたってことなのよね……）

ことが次代の柱神さまである以上、何事にも用心を怠らない彼らの態度に怒りをあらわにすることは憚れる……が。

不快感だけは、しっかり抱きこんでしまったナルレイシアだった。

（わたしとしては、ちょっとした犠牲的精神で受け入れただけの話、だったんだけどな）

それを疑われたり試されたりするだなんて、想像したこともなかっただけに、少々落ち込んだりもした。

だが、彼女の『不幸中の幸いの権化』としての真価が発揮されるのは、もうすこし先のことである。

斎王院に迎えられ、正真正銘の斎王たちと知り合っていくなかで、彼女は自分の――覚

えてもいない――前世の罪を悔いることになる。

不幸中の幸いの権化は、どこに行っても、やはり『不幸中の幸いの権化』でしかなかった。

9

季節はそろそろ晩秋にさしかかろうと言うのに、ディエーン王宮の庭は緑に溢れている。

風も心なし、城下の街より温かく感じる。

（柱神さまのご加護をまさか、身をもって実感することになろうとは……ねえ）

一年前――否、ほんの一月前まで想像すらできなかったことだ。

斎王院に移って二十日ほどになるが、ナルレイシアはいまでも驚きを禁じ得ない。光も風も緑も水も、なにもかもが素晴らしく、改めて柱神の加護の大きさに感じ入るわけである。

空を支える柱神に対して、精霊たちがたいそう好意的だという話は聞いて知っていたけれど、実際目にしたところだけとっても、それは半端ではなかった。

王宮の菜園では季節外れの野菜や果物が、旬としか思えぬ状況で収穫されるし――晩秋のこの時期、瑞々しい苺がデザートに出されたときなど、思わず目を瞠ったものだ――庭園の緑のあざやかさは、常緑樹だからの一言で説明のつくものではない。

紅葉を楽しむための一画も、別にしっかりあるというのだから、柱神さまのご加護……というか、奇蹟は際限なしである。

別に柱神そのひとが、自分の住む土地やその住人たちを贔屓しているわけではない。

周囲の精霊たちが、柱神であるひとにどこまでも好意的であるため、生じる現象なのだと言われている。

例えば寒いのが苦手な柱神の住む近くでは、冬でもあまり寒さが厳しくなかったり、逆に暑さに弱い相手の住居近辺は、夏でも涼しかったりと。その力の中心地点は、まぎれもなく柱神そのひとなのだが、そのおこぼれは当然のことながら周囲にも及ぶ。

すなわち、柱神が居を定めた地の周辺は——そのひとの好みによって多少の差はあるとはいえ——けっこう、かなり住みやすい環境が保証されたりするわけだ。

柱神の数が半数近くまで減ってしまった暗黒時代の後、数々の天変地異に襲われ、怯えきった人間が、柱神のそばで暮らしたがったという話も、ここまでの恵みを見せられたらうなずかざるを得ない。

（今はけっこう持ち直して安定してるけど、当時は本当に凄かったって話だし……世界、本当に半分滅びかけてたみたいだって話だし……そもそもそんな事態招いたのは欲に駆られたやつらだってこと考えると、人間って全然変わってないみたいで、ちょっと複雑だけど）

暗黒時代招来の秘密を、実はほんの少しだけ知っているナルレイシアはふう、とため息を洩らす。

師匠である老人に教えてもらったのだが、とてもここで口にすることはできない。

ただ、世界滅亡の危機に瀕しても、それでも抑えきれぬ欲望のままに動く人間は出現してしまうことだけは、はっきりとした現実なのだと彼女は――悲しみつつも――認識した。

とても――イヤだったけれど。

「お疲れのようですね」

疲れる客人にようやくお引き取り願い、庭の四阿で息抜きしていたときのこと。

突然かけられた声に、一瞬緊張したナルレイシアはしかし、それが見知った顔――しかも苦手意識なし――であることに気づき、ほっと肩から力を抜いた。

ディエーン貴族では珍しい金髪の少年が、にこにこ笑いながら近づいて来ていた。

ここ斎王院の住人にして、斎王のひとりである。

名はササンシール、年齢は十一で最年少である。気さくな性格らしく、初対面のときから打

ち解けてくれた、実に貴重な存在だった。

「……ああ、ササン……さま」

ササンと呼んでくださいね――とは言われたものの、呼び捨ては憚られ、ナルレイシアは愛称に敬称をつけることで許してもらった。

斎王であることを除いても、彼は――というか、斎王全員――養子とはいえディエーンの王族の身分を持つ身なのだから。

「さまはいりませんって、何度も言ってますのに、ヴィル・ダカール。斎王だとか王子とか持ち上げられてますけど、ぼくなんか没落貴族の末っ子にすぎないんですから」

そんなことを言われても、彼が『斎王』で『王子』なのは事実なのだから、とても「はいそうですか」とはうなずけない。

（それにしても相変わらず、現実的というか、割り切ってるというか……）

彼と初めて会ったときの会話は、とても忘れられるものではない。

『どうせ大したことはできないとは思いますけど、うちの家族がなにか言ってきても、無視しちゃってかまいませんから。斎王に選ばれたことだけで、神殿には入れるし、食いっぱぐれがないってことが、ぼく一番嬉しいんで』

なんでも家財を売り払うことで、ようやく食いつないでいるような貧乏貴族出身らしいこの

少年は、斎王に選ばれたとき、「これで売り飛ばされずにすむ」と安堵したのだという。

養子縁組の名目で、よからぬ趣味で知られる——世間一般でいうところの変態というやつだ——さる貴族に引き取られる話が、着々と進んでいたらしい。貴族って……と思ったものだ。

「今日はどこのお屋敷からのお使いだったんですか？　選定者の決定は期日まで絶対明かされないことになってるのに、みなさん懲りませんねえ」

「それは言えません……これも決まりですから」

守秘義務というものがある。

とはいえ、五人の斎王の身内を名乗る者たちが、ほとんどひっきりなしに彼女を訪れていることは、もはや秘密でもなんでもなくなっている。

彼らは毎回、尋常な量でない貢ぎ……もとい贈り物を手に携えてやってくる。もちろん善意のそれではない。

彼らはことあるごとに、彼女から情報を引き出そうとするのだ——つまり、次の柱神に選ばれるのは五人中、誰であるのかを。

最初のころはさりげなさを装っていたものの、少し前からけっこう執拗に食い下がるようになってきた。その態度がなんとも粘着質な感じがして、とってもイヤーンな気分を味わわされているナルレイシアなのだ。

しかも彼女が服や装飾品に興味がないと見て取るや――ナルレイシアとしては、賄賂とわかりきっているものを受け取る気皆無だったわけだが――皆攻略法を変えてきた。

先程の客は、特に危険だった。どこで誰から聞き及んだものやら、豪華装丁の稀覯本を持ち込んできてくれたのだ。

（お師匠さまのとこで読んだことのなかった本だったら、あれは受け取ってしまってたかも……あー、やばかった）

お師匠さま、ありがとうと、彼女は心から師に感謝する。

「ほんっと、理解に苦しむわ。そりゃあ、実家との縁は切れたことになってても、身内が次代さまに選ばれたら嬉しいだろうことはわかるけど……なんであんなに必死に聞き出そうとするのかしら。時々身の危険を感じるぐらいよ」

最後の言葉は冗談めかしたものの、どんどん危機感が高まりつつある状況で、半ば以上本音だったりした。

「それは当然ですよ。でも、ああ、よかった……ヴィル・ダカール、ちゃんとわかっててくださったんですね」

さりげなく告げられた不穏な言葉に、ナルレイシアはぎょっとする。

「ササン……さま？」

「だからアマンシールさまは、エルスカーネ公爵をあなたにおつけになったんでしょう？　あの方なら、そうした輩の考えそうなことがわかるからって……」

エルスカーネ公爵？

誰、それ？

（えーっと、スカルトードさんのこと、ではないわよね。ちょくちょく会いに来てはくださるけど、ご自分で貴族じゃないって仰ってたし……。でもって公爵さまといったらすごく、すごく偉い御方なのよね。王様の庶子がなったりして……でも、そんな偉いひとと会ったことなんかないんだけど……うーん？）

まったく心当たりのないナルレイシアの様子に、ササンシールが少しばかり呆れた様子で告げてきた。

「顔を会わす度に盛大な口げんかを展開なさってるじゃありませんか」

ササンシールの言葉が頭に浸透するのに、数瞬かかった。

そして、それを理解した刹那、ナルレイシアは絶叫していた。

「え――っっっっ!?　嘘でしょう!?　あれが公爵っっ!?」

行儀悪くも彼女が――反射的に――指さした先に、仏頂面で佇んでいたのは。

艶のある黒髪と、紫水晶の瞳を持つ――初対面時に天敵と、心定めた青年だった。

ガスカール・トーディアル・アルス・エルスカーネ。
彼が、五百年近くもつづく名門の当主であるという事実を知ったときのナルレイシアの偽らざる心境がなんであったのか、といえば。
（融通の利かなさも、思い込みの激しさも、五百年ものだとしたら……納得だわ）
なにかが違う感想だった。
しかし彼の身分を知ったところで、彼女の好感度が上がることはなかった。元々の性格に加え、そうなるには……この二十日ほどで悪印象がますます深まってしまったからである。
はあぁ、とナルレイシアは思わず息をついた。
「あんな毒棘だらけの性格でも公爵やってられるだなんて……先代がよっぽどしっかりした家人を揃えてらしたのね……」
なにがおかしいのか、ぶはっとササンシールが吹き出したのは次の瞬間。
ばんばんと、石造りのベンチにこぶしを打ちつけるという、かなり過剰な反応に、ナルレイシアはまたしても不安を覚えた。
斎王院においては常識とされることのほとんどを、田舎育ちの彼女は知らず、そのためこれまでもさんざん失笑を買ったり苦笑されたり爆笑されたりしてきたのだ。
（わたしったら、また変なこと言っちゃったのかしら!?）

郷に入れば郷に従うつもり満々な彼女ではあるが、従おうにもルール自体がよく見えないので目下苦戦中なのだ。

少なくとも、直接話法はあまり歓迎されない……らしいことぐらいは学習したものの、間違っても通暁したとは言えない。

「……あの……？」

思わず不安に駆られ、問いかけようとした彼女に、ササンシールが――目に涙を浮かべた状態で――「ごめんなさい」と謝ってきた。

（いえ、わたしとしては、そこで謝っていただくより、なんでそこで大爆笑に繋がったのか、そこのところをじっくり説明していただけたほうがありがたいんですけど……）

けれど、彼女の願いは今回もかなえられることはなかった。

ガスカールが近づいてきたからだ。これは一種の信号で、別の斎王が近くに来ているという意味を持っている。

選定者として公平な立場にあるべきナルレイシアが、特定の候補者と親しくしている風に誤解されかねない場面を、彼はこういう形で回避させてくれるのだ。

その手の事情には、ナルレイシアよりよほど通じているらしいササンシールがあっさり反応する。

つまり、さっさと辞去の挨拶を口にして、決して別口の客と顔を合わさない方向に、速やかに身を隠すのだ。

ほかの斎王の面子に――一名除外対象がいるわけだが――苦手意識を抱いているナルレイシアとしては、あまり嬉しいことではなかったが、不正疑惑などが持ち上がらないよう、公正さは重視する必要大の条件を備えていたため、仕方なく従っている……。

言うなれば、斎王院ルール。

選定者が、特定の斎王を贔屓する可能性を減じるために、私的な時間をも等分割する、という……。

その対象となるのは斎王に限られているわけだから、私的時間が皆無なわけではないのだが、前述した通り、その縁者の『お使い』なぞが始終面会を申し込んで来、全部を断るわけにもいかず、難渋していたりするのだ。

現実的で、最年少のくせにかなり世馴れたササンシールは、そのあたりのことを非常によく理解しており、これまでナルレイシアに面倒をかけたことなど皆無だった……のだが。

今回に限っては、なにやら少しばかり様子が違った。

いつもなら、すぐさまさっさと立ち去るはずの少年が、思い悩む風の顔でその場に立ち尽くしたのである。

世馴れていても、相手は斎王最年少。

なにかあったのかとナルレイシアが気を配るのは当然と言えば当然のことで。

「どうしたの？　なにか、気になることでもあるの？」

尋ねた彼女に、ササンシールは少しだけ躊躇う様子を見せて、その後思い切ったようにこう告げた。

「ヴィル・ダカール……。貴方はまだ、彼女には……最後の斎王との面識は得てらっしゃいませんよね？」

それは真実だったので、ナルレイシアは「ええ」とうなずいた。

斎王院を訪れて二十日強――その間に五人の斎王中四人と顔を合わせ、会話をし、さらにはその身内兼後見、及びその『お使い』……そのほとんどと会ったと自信をもって言い切れるけれど、たったひとりだけ、いまだに会えずにいる子供がいる。

理由は至極簡単で、元々体が丈夫でないその子供は、ナルレイシアが斎王院に迎え入れられた時期と前後して、体調を崩し、危篤状態にまで陥ってしまったのだ。

その少女との対面が、ようやく明日、かなう。

「そうなの！　やっと、全員と知り合えるんだと思うと……」

嬉しくて。

そう言いたいのに言えないジレンマが、またもどかしい。
相手は小さな男の子なのだ。安心させてあげなければいけないと……わかっているつもりだったのに。
どうしても、気休めが言えなかった。
そして、そんな彼女の状況を見通したかのように、少年は告げたのだ。
「ヴィル・ダカール……、本当の正念場はこれからなんですから……だから、頑張って下さいね、お願いしますから」
無論ナルレイシアに否やはなかった。
ごまかされているような違和感を、忘れることはできなかったけれど。

10

ユーカリィヤ・アライア・アルス・オースリンは、病み上がりのせいか、痩せており、実際の年齢より二、三歳幼く見えた。
つまり十三歳にも拘わらず、ナルレイシアの目には十そこそこの子供にしか映らなかったのである。
だが、その事実以上にナルレイシアを驚かせたのは、ユーカリィヤの顔だった。
スカルトードに連れられ訪れた黄神神殿で見た幻の子供――ユーカリィヤはその子供にそっくりだったのだ！
ほんの一瞬目にしただけだというのに、彼女の脳裏にはあの子の顔が焼きついている。
十歳前後の痩せた、けれど綺麗な子供。
金褐色のさらさらの真っ直ぐな髪と、必死の思いを宿した露草色の瞳――。
本当にそっくりだった。

（けれど、あの子とは違う……）

幻の子供の髪は、もっと短く、肩に届くかどうかという長さだった。身につけている衣服も男児用のもので……もちろん、男装した少女だという線は消せないのだけれど。

（でも、絶対に、あれは……この子じゃない）

そう確信してしまえるのは、少女の瞳に浮かぶ光ゆえだ。

あの幻の子供の目に浮かんでいた光と、いま目にしている少女の瞳に浮かぶそれとの間には彼我の差があった。

助けを求める——と聞けば、その当人は無力で儚いのだろうと思われるのが一般的だとは思うが、あの幻に関してだけは、そうではないとナルレイシアには言い切れる。

あれは……あの瞳は、どこまでも戦い抜くことを選んだ者のそれだ。

それに対して、ユーカリィヤの瞳に浮かぶのは、諦めの色。

絶望というほどに大きなものではなかったが、彼女がなにがしかのことに関して——あるいは複数件かもしれないが——諦め、仕方ないと思っているのは見て取れた。

聞けば幼い頃からよく体調を崩しては寝込んでいたらしい。健康とは言い難い自分の体に対するそれなのかもしれない。そしてその諦念が、本来ならもっと輝いているはずの彼女の生気を蝕んでいる……ように、ナルレイシアには感じられた。

ただの直感でしかないと言われればそれまでなのだが、なんとなくこれは間違いないと思えてしまうのだ。

しかも……実は根拠とまでは言えないまでも、心当たりと呼べるものもあったりするのだ。

（病は気から、って言葉は知ってたけど……さっきのやりとりは強烈だったもの……）

まだ全快とはいかないものの、危機は去ったということで——そのことを知ったナルレイシアは、対面を延期しようと申し出たのだが、選定結果の発表の期日が迫っていることを理由に、神殿と彼女の保護者たちがこぞって「とんでもない！」と言い立てたのだ——彼女と会うために、斎王院のユーカリィヤの部屋を訪ねたわけだが……。

予定より少々早く到着したおかげで、偶然耳にすることになった話の内容は、到底聞き流すことのできない代物だったのだ。

（はりきりすぎちゃったかしらん？　ちょっと早く着きすぎちゃったみたい……）

ようやく五人目の斎王に会えるとあって——実はそれには理由があるのだが——いつもより早くに目が覚めて、身支度やなにやらもてきぱきとすませ、しかも期待たっぷりな心境が足ど

りにも出てしまい――要するに野山を駆け回っていた健脚ぶりを無意識のうちに発揮してしまった結果――ユーカリィヤの住む一郭に到着したのは、約束の刻限より四半時ばかり早いころだった。

そのことを知ったのは、通された部屋の立派な棚に置かれた時計の針の位置を見たときで、ナルレイシアはすぐさま自らの失態を悟り、回れ右をしようとした。

張り切っている自覚はあったし、「これできっと事態は解決♡」という期待感もあった。だからつい無意識に、ユーカリィヤに一刻も早く会うために急いでしまったのだろうとはわかるのだけれど、これはあくまで一方的に自分の都合でしかないわけで、相手にしてみれば迷惑以外の何物でもない。

しかも相手は病み上がりの身だ。

（わーん！　もう、わたしったらっ！　なんて非常識なっっ！）

「ごめんなさい！」

出直して来ます――と言いかけた彼女を、しかしユーカリィヤ付きの侍女が引き止めた。

「……いえ、すぐにご案内いたしますから、どうか……」

二十歳前後の女性の目に、一瞬浮かんだ縋るような光に、ナルレイシアは内心首をかしげた。

（あれ？）

なにがどうとは言えないが、引っ掛かりを覚えた彼女は、侍女がそのまま「こちらへ」と告げたときに、目を瞠った。

普通、訪問客があった場合、その旨を主人に伝えるはずなのに、侍女である女性はそれをせず、直接案内しようというのだ。

よほど親しい間柄であるならともかく、初めての客に対する態度では断じてない。

ナルレイシアの脳裏を、疑問符が乱舞した。

なにやら事情があるのは間違いないようだが、あの縋るような目を思うと、無下にはできない気がした。

（まさか、このひとも「うちのお嬢様を次代さまに選んでください」とか言い出すつもりなのかしら？）

一番ありそうな可能性を考えてはみたものの、それはどうもおかしい。

そういう話なら、約束の時刻になるまで、応接室にでも通しておいて、その間に話を持ち出せばいいだけのことなのだ。

事実、時間ぴったりに訪れた先でも、隙を縫うようにして「うちの若様――坊っちゃま、お嬢様の例もある――を、どうぞよろしくお願いします」とささやいてくる者たちの、なんと多

かったことか。なかには――もはやうんざりしている――各実家からのお使い同様、袖の下を渡そうとする者までいた。

そういう行為は固く禁じられているはずなのだが――少なくともアラマンディからはそう聞いていた――皆懲りないというか、無視しまくりというか……呆れるほどに露骨にその線を突いてくる。

選定者の意味をはき違えているとしか思えない。

選定者とは、次代の柱神を選ぶのではないのだ、実のところ。次代の柱神に選ばれた者が誰であるのかを見極め、他者に告げるだけの役割のはずなのだが、どうも誤解を受けているらしい。

そもそも選定者、という呼び名がいけないのかもしれない。

まるで、そのひとが選ぶことによって、次代の柱神が決定されるかのような誤解が生まれるのも無理からぬこととは言える。

しかし、そんな役職につけられた身としては、迷惑極まりない話なのだ。

収賄が罪となるのは、世間一般でも同じことだが、この場合、絶対確実な神罰まで下るというとんでもなさである。

なんでも昔、他国でのことらしいのだが、届けられた賄賂に目が眩んだ挙げ句、天啓もない

相手を次代と断じた選定者がいたそうな。

しかし肝腎の神具が、選ばれた相手に対し、うんともすんとも反応せず、その詐欺は呆気なく白日のもとに晒されたというのだけれど。

だが、仮にも神に選ばれた身が、その期待と信頼を裏切り、現世欲にとりつかれるなど言語道断ということで、一族郎党に至るまで、その神――虹神中最も厳しいとされる紫神だったという説が濃厚なのだが――を祭る神殿への立ち入りを、半世紀にも渡って禁じられたというのだから半端ではない。

では他の神を篤く信仰し、乗り切ればよいではないかと、なにしろ神は七人もいるのだからと思うのは心得違いと呼ぶしかないことだった。

実際、どんな神にすがろうと、神罰を受けた選定者とその一族に、救いの手がさしのべられることはなかったという。

彼らは、七虹神中一神の加護を失い、そうして逃れることのできない斜陽の運命を確定されたのだとか。

恐ろしい……実に恐ろしい罰である。

この世界を作った神様全員に見捨てられてしまう恐怖たるや、どれほどのものだろう。

たとえ話半分にしたところで、そんなことを聞いてしまっては、到底平静ではいられないに

違いないのだ。

（あの豪華装丁本が、読んだことのある本で、本当によかった――っっ！）

いまさらながらに胸をなで下ろすナルレイシアである。

とまあ、それはさておき――。

侍女に先導されて歩いていた彼女は、少し先の部屋から、話し声が聞こえるのに気づき、眉宇をひそめた。

話の内容まではわからないが、切れ切れに聞こえてくる言葉のなかに「貴方」とか「ユーカリィヤ」とか「名誉な」とかあったものだから、先客がいることを確信し、ますます首を傾げてしまった。

「あの、わたしやっぱり出直して……」

と言いかけた彼女に、侍女は「しぃーっ」とばかりに唇に指を当ててみせた。

ますますもってわけがわからなくなったナルレイシアを手招きし、侍女である女性は扉に耳を寄せる仕種をした。

（これってば、もしかして……じゃない！　もしかしなくても、盗み聞きしろって言ってるわけ!?）

どうしてそんなことを――と、目で問いかけると、侍女は「後生ですから」とでも言わんば

かりに頭を下げてくる。

ひとさまの会話を盗み聞く――それも意図的に――のは気が進まなかったが、そのとき洩れ聞こえてきた「貴方は体が弱いのだから」という言葉に含まれた、毒気のようなものにぎょっとし、思わず耳をそばだててしまった。

声も口調も、間違いなく相手を心配しているもののように聞こえるというのに、肌が粟立つような悪寒を感じるのだ。

(なんだろう……？　すごく、気持ち悪い……)

譬えるなら、肌に粗い鑢をかけられるような感じだ。

但し、この声の含む毒気は、肌ではなく心に作用する。

健康そのものの自分でもそうなのだ。病み上がりの少女の心身に、よろしからぬ影響が及ぶのは間違いなく思えた。

侍女はそうしたことに以前から気づいており、それでこんな方法を――とんでもないことはとんでもないが――選んだのかもしれない。

気が進まないことに変わりはなかったが、結果的には侍女の勧めどおり扉に耳を寄せたナルレイシアは、聞こえてくる客人たち――そう、客はひとりではなかったのだ――の声と言葉に本能的な嫌悪感を覚えた。

「回復なされて、本当によかったこと……貴方は昔からお体が弱くてらっしゃったから、此度は本当に心配いたしましたわ」

澄んだ少女の声が答えた。

「ご心配をおかけし、まことに申し訳ありませんでした」

多分これがユーカリィヤの声だろう、とナルレイシアは思った。

病み上がりだから仕方がないのかもしれないが、声に力が感じられないのが気にはなったのだけれど。

「まあ、まあ。病弱でいらっしゃるのはユーカリィヤさまのせいではないのだから、そのように頭を下げられることはございませんよ」

別の声が、まるで気にすることはないとでも言いたげな口調で、そう告げたのだが、聞いているナルレイシアはぞわぞわと背筋に悪寒を感じた。

（うっわ、これまた気持ち悪い。気にするなとか言いながら、さりげなく病弱だって念押ししてるみたいにも聞こえるし……）

そんな彼女の疑問は、どうやら的外れではなかったらしい。

第三の声がまた、ろくでもないことを言いだしたのだ。

「ですが、選定の御方が見つかったのが、この時期でよかった。冬ともなると、下手に健康な

方と面談するのも危険なことになりますからな。聞けば、今回の選定の御方はまだ若く、しかも田舎でのびのび育った健康な方らしく、生まれてこの方風邪も満足にひいたこともないとか……ご本人は平気だからと、悪い風邪の気でも運んでらしては大変なことになっていたことでしょうからな」

（……満足に、ってのはどういう意味よ？　そりゃあ確かに、風邪ひいたのなんて片手の指で足りる程度だってのは認めるけど、風邪ひかなきゃ人間じゃないとでも言うつもりなわけ!?　それとも馬鹿は風邪ひかないって言いたいんだとか？）

むかっ腹が立ったものの、ナルレイシアはその場で爆発したりはしなかった。

そんなことをしようものなら、侍女の女性に迷惑がかかること確実だからだ。

約束の刻限より早くに訪れた挙げ句、こっそりここまで案内してもらって、盗み聞きまでしてしまったという事実は、もはや暴露できない深刻な問題となっている。

だが一番の問題とされるのは、そんなナルレイシアをここまで案内し、盗み聞きするのを看過した侍女の態度になるだろう――少なくとも、今ユーカリィヤを訪問している人物たちにとっては――ことが、はっきりと彼女には見えていた。

ぶるぶるっと、こぶしが震えた。無論怒りのためだ。

そうは言っても、このまま乗り込むわけにはいかない。

「あなたたち、どういうつもりなんですか!?」

と詰め寄ったところでしらを切られるのがわかりきっているからだ。

我慢して、我慢して――侍女と視線における意志通達を果たしたナルレイシアは、さっさと扉から身を離し――絨毯が敷いてあるから、かなりたやすかったわけなのだが――侍女の後ろで案内されるのを待っている、という風を装い――。

侍女が、問題の部屋の扉の前で口上するのを、おとなしく見守った。

「お嬢様、選定の方がおいでになりました」

ナルレイシアは知らなかったが、それはちょうど約束の時刻だったらしい。

「おお」

「では、我々はこれで」

「早くからお邪魔してしまいましたね」

口々に虚辞を述べ、退散を決めこんだ面々の顔を、結局ナルレイシアはしっかりとは確認できなかった。

なぜといえば、彼女は侍女の指定通り、近くの物陰に隠れ、潜んでいたからである。

戻って初めてしんみりと、「かなり大変そうですね」と言うと、侍女の女性は得たりとばかりに微笑み、「そうなんです」とうなずいた。

11

「あの……」

と、思い切ったようにユーカリィヤが話を切り出したのは、部屋に案内されて半時ほどたったころのこと。

ロスタロイドをでたことがないという彼女に頼まれた形で、フィレアのことをあれこれナルレイシアが話して聞かせていたのだ。

室内には先程案内してくれた侍女――チュランカ――が控えており、ほかの面々が出入りすることはない。それでもチュランカの様子を見ていると、かなり用心しているのが見て取れて――先程のことを考えると、盗み聞きは案外たやすそうだとわかるだけに尚更だ――ナルレイシアは少しばかり頭痛を覚えた。

「ナルレイシアさま……その、不躾なことをお聞きするようで気を悪くなさらないでいただきたいのですが……」

遠慮がちな声にも表情にも、やはり生気の輝きはあまり見えず、ナルレイシアは胸中、先程の客人たち――どうやらユーカリィヤの親族連中らしいのだが――に対して舌打ちせずにはいられなかった。

あなたは一族の誉れなのだから頑張って次代に選ばれるよう努力しなければ……というのまではいいと――本当はよくないが――するとしても、だ。あの「あなたは病弱」口撃……あれはなんだと大声で問いたい。

悪い言葉は悪いことを引き寄せる。俗に言霊の力と呼ばれるものだが、しょっちゅうあんな言葉を聞かされていたら、本当にユーカリィヤに『病の気』が寄ってきてもおかしくはない。

……それに、聞かされる身の心境というものも、彼らはわかっていないとしか思えない。どんな荒唐無稽な話でも、繰り返し聞かされていると、ふとそんな気になってしまうことは珍しくはない。暗示というやつだ。

ことあるごとに「病弱だ」と繰り返されていたら、本人もすっかり自分は病弱だと思いこんでしまうのではないのか。しかもあの、ちょっとした病が命取りになるとでも言わんばかりの台詞……ようやく回復に向かいつつある少女に聞かせるには、あまりに無神経ではなかろうか。

（あーもう、思い出しただけで腹が立つ！）

このとき、ナルレイシアは『思い出し怒り』で、百面相を演じていたりした。
無論本人無自覚なのだが、「あ、あの？」と問いかけてくるユーカリィヤの声に怯えがまざっていることに気づき、はっとして表情を改める。
「え、ええっと、ごめんなさい……なんでしたっけ？」
えへら、と笑顔で問い返したナルレイシアに、ユーカリィヤはそれはそれは申し訳なさそうな顔で息をつき、責めるような視線をチュランカに向けた。
「チュランカ……あれほど言っておいたのに……。選定の御方は中立であることが前提なのよ。家の事情は決してお知らせしないように通達があったことは、あなたもわかっているでしょうに……」
さすがは名家の令嬢というべきか、侍女への態度は堂々とした立派なものだった。
これが子供の我が儘の延長としての叱責のたぐいであれば、すぐにも口を挟むつもりだったナルレイシアだが、どうも、様子が違って困惑する。
（こうしてると、生気というか、覇気というか……ちゃんとしっかりあるんだよねえ……）
なのになぜ、先程の親族に対してはああも受け身で消極的だったのか……。
内弁慶という可能性もあるけれど……と、そこまで考えたとき、ユーカリィヤがナルレイシアに目を向けてきた。

「ナルレイシアさま、お話しを中断するような形になって申し訳ありません。それで……あの、本当に、違っていたら失礼この上ないことなのですが……我が家の……オースリン家の名でもって、使いの者や……その、物品が、送り届けられるなどということが」

もしかしたら、これまであったのではないでしょうか？

見つめてくる彼女の目を見れば、言いたいことは明らかで、同時にナルレイシアは、それが彼女の意図したものではない——恐らくは先程の面々による独断であることを確信したのである。

ごまかそうかとも思ったが、ユーカリィヤの真っ直ぐに見つめてくる目を見れば、彼女がすでに確信しているのが瞭然だったから、ため息まじりにうなずいた。

「……ユーカリィヤさまのお心とは無関係だってことはわかってますから」

（まあ、他の斎王さまのなかには、すっかりその気だって方もいらっしゃるけど、ね）

とは、口には出さない。

ユーカリィヤが実に悲しそうに、俯いたからだ。

「あのひとたちの愚かな行為を、どうかお許しくださいまし。お金や物品で神意が買えるはずもないことを、どうしてもわかってくれないのです。それというのも、当代さまも先代さまも先々代さまと三代に渡り、国内屈指の名家のご出身だった上、その後御実家がますますの繁栄

を誇りましたものですから」

つまり、ここ三代の柱神を選んだ人物たちは、取り引きを受け入れたのだ――と、少なからぬ人間が信じているということなのだろう。

（確かに当代さまは王家であるファラスース家のご出身だものねえ。なるほど、そういう思い込みがあるんなら、せっせと賄賂持ってくるのもうなずけるわぁ）

得心がいったところで、ちっとも楽しくはなかったが。

オースリン家も、北部に広大な領地を所有する侯爵家だったと記憶している。

次代に選ばれる資格充分だと、親族の面々が考えたとしてもおかしくはない。そういえば、ササンシールにしても、『古いだけが取り柄の、没落しきった貧乏貴族』と、自分の家のことを言っていた。

わが子を身売り同然に変態に売りつけるほどに困窮していることと、由緒正しい古い名家であるということは、よくよく考えれば矛盾するものではないのだ。

もしかして、このディエーンでは、斎王に選ばれる基準に、名家出身という条件が設けられているのだろうか？　だとしたら……あまり現実的とは言えないそれが原因だと、いま抱えている悩みも少しは薄らぐのだけれど。

だが、その疑問を、当事者のひとりであるユーカリィヤに尋ねるのは気が引けた。

聞きようによっては「あなたは名門に生まれたから斎王になれたの？」といった意味合いにも受け取れてしまうではないか。さすがにそんなことは訊けるものではない。

代わりに、別のことを尋ねることにした。

「そういえば、ユーカリィヤ様はオースリン家の一人娘でらっしゃるんですよね？　もし、次代さまに選ばれたとしたら、お家のほうはどうなるんですか？」

あくまで仮定の話として持っていったつもりだったが、いささか「もし」を強調してしまったかもしれない。

視界の隅で、チュランカは瞠目し、ユーカリィヤは……淡く、かすかに苦みを孕んだ笑みをたたえて答えた。

「選ばれても選ばれなくても、似たようなものですわ。斎王に選ばれた時点で、わたくしたちは王家の養子であると同時に神殿へと籍を移してしまいましたから。選ばれた場合はもちろん、それは神籍にさらに移ることになりますけど……斎王に選ばれた者は、還俗は認められませんから、オースリンの所領と財産については、分家の人間が管理することになると思います」

れっきとした直系がいるのにですか!?

……とも、やはり口には出せなかった。いくら仮定の話とはいっても、次代の選定に関する

憶測や誤解を招く言動は、断じて慎まなければならないことだからだ。

（ふーん。結局どんな結果になっても、オースリン家の財産はあのいけ好かないひとたちの手のなか……ってことなのね。だったら自分たちの得になるよう、ユーカリィヤをせっせと持ち上げて、次代になれー、次代になれーって煽てて励ました方が、彼女もその気になって頑張る気力も湧いてきそうなものなんだけどなー）

どうにも、腑に落ちない。

あの『貴方は病弱』口撃は、ではいったいなんのためであったのか。

もし、選ばれなかった場合、還俗及び実家との復縁が認められるのであれば、それを歓迎できない親戚連中が、こぞって精神攻撃を仕掛けてきたのだという仮定も成立するのだが……聞いた限りの事情においては、彼らの行為の意味がさっぱりわからない。

（でも、なにか……引っかかる、のよねえ）

とても、とーっても引っかかる。

胸の奥がざわざわして、これは忘れたり見逃したりしてはいけないのだと、なにか強く訴えかけてくるのを感じる。

けれど、具体的なことが何一つ見えないものだから、苛立たしいやらもどかしいやら。

胸がざわめく原因を、見極めきれずに困惑していたナルレイシアは、突然室内の空気が緊張

したことに気づき、その発信源を振り返った。
チュランカだった。
鋭い視線をこの部屋唯一の扉に向けた彼女は、ほどなく肩から力を抜いた。
そうしてようやく、ナルレイシアの耳にも近づいてくる――決して隠そうという意図の感じられない足音が届いたのだ。
控えめのノックの後――用心のためか、チュランカは扉を閉ざしたまま誰何し、用件を聞き出したのだ。
聞こえてきたのは、慌てふためいた少女の声だった。
「あの……あのっっっ！　エルスカーネ公爵閣下がおいでになって……その、選定の御方をすぐに、その……」
「はあ？」
意外すぎる人物の名前を耳にして、ナルレイシアは目を瞠りつつ首をかしげてしまった。
エルスカーネ公爵ガスカールとは、最悪の出会いを果たしたにも拘わらず、なんの因果か当代柱神であるアマンシール直々のお声掛かりで、護衛のような役目についてもらっていたりする。
とはいえそれは、あくまで予期せぬ危険が潜んでいるとされる王宮外への外出時に限っての

ことだったはず、なのだが……。

「あいつが……？　なんだって……」

首をかしげたナルレイシアに、ユーカリィヤはなぜか、安堵したような顔でつぶやいた。

「……そう、公爵様が……」

そう洩らして、彼女はぎゅっとナルレイシアの両手を握りしめた。

「安心いたしました。公爵様がおいでなら、きっと大丈夫ですわね。ただ……それでも、ナルレイシアさま、どうかご用心くださいまし。わたくしと……最後の候補であるわたくしと会ってしまった以上、各家の動きはこれまでとは比較にならぬほど活発になるに違いありません。その結果、ナルレイシアさまをよからぬ企てに巻き込もうとする輩が出ないとも限りませんから……」

可能性を示唆しているようでいながら、なぜかユーカリィヤの口調は確信に満ちていた。

思いも寄らなさすぎることを告げられ、仰天したのはナルレイシアだった。

思わず瞠目した。

「それって、いったい……」

どういうことかと尋ねた彼女に、ユーカリィヤはしかし悲しげな顔でかぶりを振るばかりだった。

「当事者のひとりであるわたくしからは、これ以上のことは申し上げることはできません。ですが……どうか、これから先、くれぐれもお気をつけてくださいますよう……切にお願いいたします」

意味深長にして、なかなか不穏なこの台詞に、ナルレイシアは背筋が寒くなるのを感じた。

（つまり、もしかして、命に係わる危険もあり得るってことっ!?）

今度ばかりは不幸中の不幸を引き当てたような気がして、衝撃のあまり固まってしまったナルレイシアだった。

ガスカールという青年公爵が、客観的に見れば、かなり魅力的な容姿の主であることを、ナルレイシアが発見したのは、ユーカリィヤの元を辞去する際、彼が――相手は彼女ではなかったのだが――見せた笑顔を目にしたときのことだった。

初めて会った時には、要修理の書物に気を取られていた上、あまりにもあまりな彼の無礼な言動に腹を立て、それどころでなくなってしまったし、以降も全然態度を改めようとしない彼とは喧嘩三昧の日々、当然のことながら、笑顔などお目にかかったこともなかったものだか

ら、彼がユーカリィヤに微笑みながら挨拶したときには、思わず目を疑ったほどだ。
眉間に皺を寄せた仏頂面しか見たことがなかった彼女は、意外にも穏やかでやさしげなその笑顔から目が放せなかった。
(うわぁ、こんな顔もできるんだ……びっくりだわ)
と、そんなことを思ったわけだが、ふたりきりになった途端、彼の表情はいつもの不機嫌を絵に描いたようなものに戻ってしまった。
そのことを、少しだけ残念に思う自分に気づき、ナルレイシアは思わず焦ってしまった。
(いまの、なし、なし! 人間顔じゃないんだから! こんな頑固でひねくれ者の笑顔をもう少し見ていたかった……なんてのはなし!)
もちろん、世の中には見ているだけで幸せになるような、綺麗なものはあるけれど、こと人間に関しては、やはり重要なのは中身であって、そうである以上、外見だけに価値を求めるべきではないのだ。
(そうよ……ファティ・リンシャのように、お心ばえも素晴らしい方ならともかく……こいつのはきっと上辺だけに決まってるんだから!)
必死に自分にそう言い聞かせるナルレイシアは、自分もかなり思いこみで決めつけている事実には気づいていない。

そうして、それを助長するかのように、ガスカールの態度が……またひどかった。
「なにを惚けてるんだ？　緊張感のないやつだな。斎王君はどなたもお前に、忠告してくださらなかったのか？」
どちらの答えを口にしようと、最後には鼻で笑ってお終いになりそうな問いかけだった。
なにも告げられていないと言えば、「斎王方の信頼を勝ち取れないとは、選定者が聞いて呆れる」とでも嘯かれそうだし、それらしいことは……と答えれば、「それを聞いても気を引き締めようとは思わないのか？　心身ともにだらけきっている証拠だな」とでも厭味この上ない顔と口調で言い切られてしまいそうだ。
なまじ、ここ二十日ばかりというもの、さんざん口げんかしてきた相手であるので、口にしそうな言葉が簡単に想像できてしまうのが……寒い。
だが、事態の深刻さを考えると、厭味に怯んでいる場合ではない。
思い切って、ナルレイシアは――昨日までと違い、すぐ隣を歩いているガスカールを見上げて問いかけた。
「人聞きの悪いこと言わないでよっ！　ちょっと……考えてただけじゃない。確かに気をつけるように忠告してくださる方々はいらしたけど、はっきりしたことは仰らなかったし、だからどういうことなのかと……」

単刀直入に、どういうことなのか質問するつもりだったのに、噛みつくような口調で半ば喧嘩腰になってしまったのは……ほとんど条件反射である。

（あぁぁっっ！　こんなんじゃいけないのにーっっ！）

反省した彼女は、ここは忍の一字で行こう、と胸に刻んだ。

「ごめんなさい。謝るから、ここはちょっとだけ個人的な感情は抑えて、教えてもらいたいことがあるんだけど」

そう言った彼女は、次の瞬間どきり、とした。

先程目にした笑顔を別にすれば――正確に言うなら、自分に向けられた顔という意味では、初めて、ガスカールが仏頂面以外のそれを浮かべたからである。

……『意外』と大きく顔に書いた、驚きの表情だったのだが。

ちょっとむかっときたが……後回しにする。

「斎王さま全員にお目にかかった以上、各斎王さまの御実家からのお使い攻勢がいやますだろうってことと、それが加熱しすぎた場合、わたしの身の安全にも関わってくる……みたいなことを言われたの。まあ、自分の家から栄えある柱神さまがお立ちになったら、それは大変に名誉なことですもの。しかも柱神さまを出した家は、その後栄えるという話も伺ったし、だったらあのお使い攻勢も理解できないわけではないかな、とは思ったんだけど。でも、だからって

なんでわたしの身の危険って話になるのかが、どうしてもわからないのよ。柱神さまって、そりゃあ元々が人間なんだから、御座におつきになった後でも、ちょっとぐらい身内を贔屓したくなられてもおかしくないとは思うから、各家がそれぞれ自分の家の斎王さまを選ばせたいと思うところまでは……まあ、理解できるんだけど」

ふう、と息をついてナルレイシアはガスカールを仰ぎ見る。

「僅かなお金のために、ひとの命を奪うひとがいるって、それぐらいのことはわたしだって知ってるのよ？　でも、わたしが選ぶかもしれない次代さま候補が、自分の家の出身じゃないからって、それだけの理由でわたしが狙われるのって、いったいどういうことなの？」

このナルレイシアの問いに対するガスカールの答えは――呆れたような深いため息だった。

「……おまえ、本当になにも知らないんだな」

斎王院に来て以来、ずっと気にしていたことだったので、頭に血が上った。

「そうよ！　どうせ無知よ！　ロスタロイドのことなんて、なんにもわかりゃしないわよっ！　わーるかったわね！」

怒りと恥ずかしさのあまり、顔が熱くて――真っ赤になってるだろうことさえ、このときのナルレイシアはわかっていなかった。

この一月足らずの間に思い知らされたことはやまほどあった。

貴族階級にある者と、そうでない者とでは一般常識と呼ぶものの認識に彼我の差があること……けれど、困惑もあらわに、暴走するナルレイシアの頭部を――本人なでているつもりかもしれないが――実際にはぐしゃぐしゃに乱しまくった青年は、慰めのつもりか……結局全然そんな意味合いを持たないどころか、さらに彼女がへこみそうな事実を打ち明けてくれたわけである。

「仕方ないだろう……やつらにしてみれば、新王朝開闢の成否がかかってるんだ」

ナルレイシアの涙がぴたりと止まった。

目が点になり、次いで思考が錯綜し――。

そうして彼女は絶叫した。

「ちょっと、ちょっと、それってばどういうことなのよ――――っっっ！」



12

突然『休日』が降ってきたのは、ナルレイシアがユーカリィヤと対面を果たした五日後のことだった。

夕食時に王宮からの使者が訪れ、斎王全員を招待したいので、これこれこの日の予定はなかったことにしてもらいたい——という旨の書状が届けられたのだ。

ずいぶん急な話だとは思ったが、もとより雲の上の方々の『思し召し』である。下手に一緒に招待されて、慣れない場で醜態をさらすよりはよほどいい、とナルレイシアは愛想よく「わかりましたわ」と答えた。

本来ならもっと恭しい言葉で対応しなければならないはずなのだけれど——使者として訪れた男性が口にした名は、まぎれもない貴族のものだったのだから——斎王院に入るにあたって注意されていたことがあったため、ずいぶん偉そうな態度になってしまった。

黄神神殿最高司祭であるアラマンディをはじめとする神殿関係者は、それはもう、うんざり

するぐらいにしつこく「尊大なぐらいに偉そうに振る舞え」と繰り返してくれたのだ。

神に選ばれた選定者が、現世の身分に囚われるなど愚の骨頂であり、変に下手に出て、舐められるようなことになってはいけないから――というのがその理由だった。

「貴方は神の指なのです」

とも言われた。

「卑屈に受け取られる危険性のある言動は、断じて謹んでいただきます」

とも。

（別に、丁寧に対応したからって、卑屈だってことには繋がらないと思うし、逆に偉そうにふんぞり返ったって、偉さの証明にはならないと思うんだけど……）

と、首をかしげたナルレイシアだったが、しばらく斎王院で過ごす内に、なんとなく彼らの言いたかったことがわかったような気がした。

ぶっちゃけた話、問題は自分の出自……は、ともかくとして、女であること……も、まあ前例がないでもないから差し引くとして……若輩であるということなのだと。

これまで――他国の例を見ても――選定者に指名された者は、皆知識も経験もたっぷり積んだ人物ばかりだったのだと聞く。

当然、今回もそういった人物が選ばれるに違いないと、皆が皆信じて疑わなかったという。

ところが、蓋を開けてみれば、平民で田舎者の、しかも十六の小娘。舐めてかかる者が出るのは火を見るより明らかだと、そこまで見越しての指導だったのだなと、今ならわかる。

一部の斎王と、大部分の『御実家からのお使い』たちは、侮る思いを隠そうともせず、厚顔無恥な申し出を口にしさえしたのだから。

曰く「わたしを選ぶなら、出自には目を瞑って正妃に迎えてやってもいい」だの、「お心ひとつで、お父上の事業はますますの発展を見られることでしょう」だの、もう言いたい放題である。

まあ……そんな面々とのつきあいに、正直疲れていたこともあって、この突然降って湧いた休日は、ナルレイシアにとってもありがたかった。

外出も自由だと言われたので、真っ先に考えたのは、ファティ・リンシャに会いに行くことだったのだが、まるでそんな思いを見透かしたかのように、ガスカールが冷ややかーな声で釘を刺してくれたものだから……諦めた。

「狙われている身で、まさかファティ・リンシャのお屋敷に近づこうなどと思ってはいないだろうな？」

殺気すらも感じ取れるド迫力のひくーい声に、反発することも忘れて、ナルレイシアはかぶ

りをふった。

本音を言うなら、非常に会いたかったし、出来ればガスカールが言っていた王朝開闢の事情なども教えてほしいと思っていたのだが、そう言われてしまっては――自分の抱える問題で頭がいっぱいになって、そうした配慮を忘れてしまっていたことを、彼女は心底恥じたわけだが――内緒でこっそりとでも、訪ねるわけにはいかなくなってしまった。

（となると……あと、そうした事情に詳しそうな方っていうと、スカルトードさんか、アラマンディさまってことになるんだけど……）

いかんせん、あの尋常ならざる美貌の青年は、『出たら鉄砲玉』をまさに実践している人物で、一度屋敷を出かけると、どこに行ったのかもいつ戻るのかもわからないという、じつに家人泣かせのひとなのだ。

さすがに半月以上、連絡なしに出かけることはないという話だが、つまり十日前後は連絡不能になることは珍しくもなんともないというとんでもなさ。でもって、ほんの二日前、相談したいことがあるから会いに来てはもらえないかという旨の手紙を届けさせたところ――今回のような『休日』は、本来あり得ないもので、選定結果の発表まで、選定者は斎王院から一歩も外に出てはいけないことになっているから仕方ない――ちょうど、その前日に、毎度のことながらふらりと屋敷を出、以来なんの連絡もないため、いつになるかわからない……と、家人の

伝言が返ってきたばかりとあっては、会える可能性は限りなく皆無に近い。

（だけど、アラマンディさまはさすがにこの国の最高司祭のおひとりだけあってお忙しそうだし……第一、「下手に俗世の事情に通じることで、神の与えたもうた目が曇るようなことにでもなれば、取り返しがつきません！」とか言って、断固教えてくれなさそうな気もするし……うーん？）

つまり、そうなると、出かける先もなく、事情を教えてもらえそうなひととの接触もなし、ということになるわけだ。

いや、正確には、事情を知っていそうな——というか、確実に知っているに違いない——人物が、もうひとりだけ、いることはいる。

ガスカールがそうだ。

だが、ナルレイシアとしては間違っても、彼にだけはその話題を振りたくはなかった。

犬猿の仲である青年に対する意地ばかりではない。というか、先日も実践した通り——スムーズに、とはいかなかったが——彼女は必要があれば、どんなにいけ好かない相手に対してでも、頭を下げてものを頼むことができる。

問題は……あのときにガスカールが見せた、自嘲めいた翳り、だ。

『ディエーンが、何度も王朝交代をなしながら、国名を決して変えようとしなかった理由がわ

かるか？』

問いかけてきた紫の双眸に宿っていた、あの暗い光――いや、翳り。

あんなものをまた見るなど御免だった。

だから、ガスカールには訊かない……訊けない。

だが、そうなると、いよいよ、空いたその日、やることがなくなってしまうのだ。

しかし、ナルレイシアは切り替えが早かった。

（まあ、久しぶりにのんびり読書三昧の一日というのもいいかもね。稀覯本の数ではファティ・リンシャのお屋敷には及ばないけれど、ここの書庫もかなり充実してるし。そうだわ、せっかくだから、リリシンエールの詩集の詩のいくつか、書き写してしまおう♡　まったく……年長の斎王さまたちときたら、ひとがなにか書いてるってだけで、必ず覗きに来て、しかも中身を確かめなきゃ諦めようとしないんだもの……鬼のいぬ間になんとやら、だわ）

とまあ、前日の時点で、すっかり『休日は読書三昧』のつもりになっていた彼女は、翌朝、いつも通りの時刻に目覚め、（なに読もうかなー？　頑張れば三冊はいけるかしらん？）などと思いながら朝食を摂っている最中、思いもかけない客人を迎えた。

「朝早くから失礼。なんでも今日は公務が休みだと耳に挟んだものでね」

そう言いながら微笑む青年の緑がかった金色の髪は、東向きの窓から射しこむ陽光を受けて

きらきらとまばゆく輝いている。
そして、何度見ても、人間のものとはとても思えぬ美貌は、笑顔効果も相まってか、直視できない威力を放っている。
「スカルトードさん！」
（絶対会えないと思ってたのに……奇蹟だわ！）
瞳を輝かせ、なにがなんでも話を聞かなければ、と心に誓うナルレイシアに、スカルトードは微笑みながらこう告げた。
「外せない予定がないようなら、少しつきあってもらえないかと思ってね」
どう？　と目で問いかけられた彼女が答えるより先に、第三の声がきっぱりと言い切った。
「だめだ」
ガスカールだった。
ユーカリィヤとの対面を果たして以来、彼は寝室と浴室と洗面所以外の場所には、必ず同席するようになっていた。はっきり言って息苦しい。とはいえ、ユーカリィヤやササンシールの忠告を考えると、「離れてて」とも言えない。
が、このときばかりは「出てけ！」と怒鳴りつけそうになった。
「なに勝手に決めてるのよ!?」

「当たり前だろう。お前の身の安全をはかるのは、わたしの務めだ。こんな時期に外出するなど認められるわけがない。貴様も貴様だ。他国ではどうか知らないが、この国では次代の選定には……」

「言われずともわかってるとも。だからといって、そんなことを言っていたら、ヴィル・ダカールはこの先最低一年は、外出もできないことになるじゃないか」

冷ややかな声で告げられた内容に、ナルレイシアは目を点にした。

「いちねん？　それっていったい……」

この言葉に、スカルトードはあからさまに不快な顔になった。

そんなことも知らないのかと言外に告げられたような気がして、ナルレイシアは思わず首をすくめてしまう。

（外国の方であるスカルトードさんもご存じだということは、当然知ってなきゃならないことなのよね……。わたしって、本当にもの知らず……？）

ずずん、と落ち込んだ。

だが、それは彼女の勘違いだった。なぜならスカルトードは険しい眼差しを、彼女にではなくガスカールに向けたのだから。

「どうやら君は、必要なことすらヴィル・ダカールに話していないようだね。なにも知らせず

狭いところに押し込めて、それで果たして守っていると言えるのかな？　第一、判断材料も与えずに、彼女にどう気をつけろと言うつもりなんだい？　君がやっているのは人間を守るやり方じゃないよ」

もし立っていたら、思わず後退るかもしれない冷ややかな声だった。

（ス、スカルトードさんってば、こんな声も出せるひとだったんだ……こ、怖いよぉ）

なまじ人間離れした美貌の主であるだけに……気分は極寒地獄である。

だが、そんな彼の非難にも、ガスカールはたじろぐ風もなかった。ある意味すごいかも、と変なところで感心したナルレイシアは、次の瞬間どきりとした。

「……貴様に、なにがわかると言うんだ」

紫水晶の双眸に浮かんだ、暗い翳り――。

（あ、だめだわ、止めなくっちゃ）

理由はわからなかったけれど、こんな表情がいいものであるはずがない。

そう思い、だがなんと口を挟んだものかと必死に考え始めたナルレイシアの耳に、スカルトードのさらなる口撃が飛び込む。

「わかるはずがないだろう、君が口にしようともしないことなど。自分からわかってもらう努力をしない人間に、なぜわからないなどと責められる覚えはないね」

きつい一言に、つい息を詰めてしまったナルレイシアだった。
両者の間に、見えない火花が見えてしまった。
（こ、こあいよー）
けれど、この展開はまずい――絶対まずい！
「あ、あの……！」
なにを言うかも決めぬまま、口を開いたナルレイシアの耳を、ガスカールの怒鳴り声が襲ったのは、まさにその刹那――。
「だったら言ってやる！　貴様はこいつがどれだけ人騒がせか知らないから、そんな理想論を唱えてられるんだ！　ちょっと目を離した隙に、斎王さまとふたりでいなくなったと思ったら、庭園の栗の木の近くで、即席の竈をつくって大鍋を煮立ててたんだぞ！　しかも煮てたのは実じゃない、毬だ！」
うっ、とナルレイシアは胸を抑えた。
……その記憶は、確かにある。
「だから……栗の毬を煮詰めた汁は、素朴だけどいい色の染料になるって話したら、セリアラさまが実際に見てみたいって仰ったから、やってみて見せたんだって説明したじゃない。定着材にお酢を使ったせいで異臭騒ぎを起こしたのは申し訳なかったと思うけど……」

「おまけに実の方は竈に放り込んで！　おかげで破裂音が起こって大変な騒ぎになった」
「入れた位置は確認しておいたのよ！　爆ぜる前に取り出すつもりだったんだってば！　万一爆ぜても大丈夫なように、竈口には絶対近づかないようにセリアラさまには約束してもらったし……」
「だが、実際に、爆ぜた」
それについては弁解の余地なしである。
まさかセリアラが食べられない部分や、別の木の実をこっそり竈のなかに放りこんでいたことに気づけなかったのは、確かにナルレイシアのミスなのだから。
しゅんとしてしまったナルレイシアをよそに、ガスカールは次々と、彼女から目を離せない根拠なるものを羅列していく。
ガスカールは不実な人物ではない。だが、寛容な人間でもない。
語られた彼女に失敗談の数々に、さすがにスカルトードも目を瞠った。
本当ですか？　と目で問いかけられたときには、穴があったら飛び込みたいとまで、思ってしまったナルレイシアである。
「それは……まあ、多少の同情の余地はあることを認めてもいいけれど……」
そう言い、スカルトードは別方向からの攻撃に転じた。

「だからって、彼女をいつまでも蚊帳の外に置いておくのは得策ではないよ。君があくまで否やを唱えるようなら、事情を彼女に説明できる、他の方々を彼女に紹介するまでだ……で、どうするつもりだい？」

スカルトードの問いに、ガスカールは顔を顰めた。

先程浮かべた、危険な光はない……けれど。

「勝手にしろ」

と、言い放たれた瞬間、ずくん、と胸が痛んだ。

どうしよう、と思って、心が揺れて、揺れて……。

結局、答えが出せないうちに、「つきあってくれるね？」と尋ねてきたスカルトードを見、そうしてガスカールを見――。

視線を合わそうともしないガスカールの横顔に、なぜかがっかりするものを感じながら、ナルレイシアは「はい」とうなずいた。

「……まったく、世話の焼ける……」

これ見よがしにつぶやかれたガスカールの言葉に、頭がぷちんと切れたのは次の瞬間のことだった。

「あんたにそんなこと言われる筋合いないわーっっ！」

眉間（みけん）に青筋を立てての、大絶叫だった。

13

ナルレイシアが連れて行かれたのは、ロスタロイド郊外にある、こぢんまりとした屋敷だった。

一見、なんの変哲もない、素朴で小ぎれいな屋敷だったが、馬車を下りるなり、彼女は既視感に見舞われ、小さく首をかしげた。

なんだか覚えのある空気というか、気配を感じ取ったせいだった。

（ここの雰囲気って、どことなく……）

なにかと――どこかと似ている、と思った彼女の勘は正しかった。

スカルトードとガスカールとともに――勝手にしろと言いつつ、あの黒髪の青年は、結局ここまでついてきたのだ。責任感ゆえなのか、それともただの意地なのかはわからないが――案内された部屋にいる人物を目にした瞬間、彼女は答えを見いだした。

「ファティ・リンシャ！」

明らかにファティ・リンシャの屋敷とは、趣味の違う、だが洗練された調度で整えられた部屋のなか、相変わらずのやさしく穏やかな笑顔で迎えてくれた初老の婦人の顔を見るなり、ナルレイシアはこの屋敷の纏う空気が、『魔法屋敷』のものとよく似ていることに思い当たったのだ。

「ナーシア！　よかったこと！　心配ないとは聞いておりましたけれど、どうにもあなたの無事な姿を見ないことには安心できなくて……ああ、本当によかった」

そう言って、青灰色の瞳を潤ませながら、ナルレイシアを抱きしめる。

（ああ、ファティ・リンシャ、なんてお優しい……）

じーん、と感動に浸りかけた彼女は、しかし「うん？」と首をかしげた。

件の曲者どころではない事態が持ち上がった際――つまり、本人の意思とは関係なく、斎王院行きが決定して間もなくのころ――あれもこれも口外禁止との注意事項を受けて、添削とは言いながら、ほとんどこれって検閲じゃあ？　と言いたくなるような環境下で、彼女はファティ・リンシャに手紙を認めた。

屋敷にしばらく戻らない旨をその手紙に書くよう指示された理由というか事情は、ナルレイシアから見ても非の打ち所のない完璧なもので、指導する人物が黄神殿最高司祭アラマンディでなかったら、（まさか、このまま謎の失踪を遂げる羽目になったりするんじゃあ……）と

疑いかねないところだった。
つまり、ファティ・リンシャへの手紙には、一言だって自分が選定者であることは書いていなかったのだ。
なのに、今、なぜだかファティ・リンシャが目の前にいる。
それはどういうことなのか？
思った瞬間、ナルレイシアは背後を振り返った。
立っているのはスカルトードとガスカール――ふたりとも、あの『魔法屋敷』に立ち入ることを許された人物である。
当然、ファティ・リンシャとの接触も可能なわけであり、なにを洩らしてもおかしくはないわけだ。
（わたしはさんざん周囲から、守秘義務、守秘義務ってうるさいってのにー！）
ファティ・リンシャと会えたことは、心から嬉しかったけれど、ひとの様子、本人には無断で誰かに報告するってのはどうなのよ!?
怒りはそのまま容疑者二人へ降りかかる。
「……どっち？」
問いの意味を瞬時に理解したのだろう、スカルトードが苦笑しながら両手をあげた。

「誤解ですよ、ヴィル・ダカール。いえ、ファティ・ナルレイシアとお呼びするべきかな？」

げんなりした。

ファティとは、高貴な女性につける尊称だ。選定者だからと、そんなものをつけられて呼ばれては、背筋がぞわぞわして落ち着かない。

「じゃあ？」

と、今度はガスカールに目をやったが、彼は不機嫌な面持ちで沈黙したまま答えなかった。いかにも不愉快そうなその顔から察するに、疑われること自体、面白くないらしい。

ではいったい誰が……と首をかしげたナルレイシアの前に名乗り出てきたのは、意外すぎる人物だった。

「そのふたりを疑わないでおくれ、リル・ナーシャ。ギスカリールとは古い友人でね、君のことを心配しているようだったのでね、お節介かとも思ったが、一肌脱がせてもらったんだよ。難しい時期なもので、直接連絡するわけにもいかなかったから、わざわざ君とファティ・リンシャには、足労を願ったわけだが……」

そう言って扉から現れたのは、当代柱神アマンシールだった！

予想もしていなかった人物の登場とその言葉に、ナルレイシアは忙しく瞬きを繰り返した。

彼の台詞の一部が、よく理解できなかったのだ。

「ギスカリール……？　誰だっけ、そんなひと、知り合いにいたかしらん？」

考えこんだ彼女が、ようやくその名に該当する人物を思い出せたのは、アマンシールが口にした『リル・ナーシャ』という呼び名のおかげだった。

小さなナーシャ――とでも訳すべきその呼び名を用いる人物は、彼女の知る限り、ひとりしかいなかったのだ、ほかの親しいひとたちは、ファティ・リンシャのように、ナーシア、と呼ぶのだから。

「……って、お師匠っっ!?　あのひと、ギスカリールって名前だったんですか!?」

後に、「普通、もっと別のところで驚かないかな？」とスカルトードに笑われた彼女の悲鳴にも似た叫びに、男性陣が首をかしげるなか、ファティ・リンシャだけが、うんうんとうなずいていた。

人間誰でも若いころはある――と、理屈ではわかっていても、父ですら妖怪爺ぃと呼んでいた師匠が、若かりしころロスタロイドに住んでおり、しかもアマンシールと親しくつきあっていたという話は、ナルレイシアに大きな衝撃を与えた。

なまじアマンシールが三十代半ばにしか見えない容姿の主なだけに——頭では、二百歳を過ぎていることはわかっているのだが——激しい違和感を覚えずにいられない。

彼女の脳裏には、妖怪めいた老人の姿がしっかりくっきり刻みこまれており、若いころを想像するのは至難の業だった。

（わたしってば、未熟……）

そう思わずにいられないのは、すぐ隣の席に、ころころと朗らかに笑うファティ・リンシャがいたからだ。

「なんでもずいぶんやんちゃをなされたとか。下町に出かけた挙げ句、喧嘩沙汰に巻き込まれて、警邏隊の詰め所に一晩泊まったこともあったとか聞きましたけれど？」

耳を疑うようなことを、実に楽しげに口にする老婦人は、大した心臓の持ち主に違いない。

「少し違いますよ。巻きこまれたのではなく、ギスカリールが起こしたんです。イカサマ賭博をしかけてきた男たちを相手にね。それに詰め所に引っ張られたのはそのときではありませんよ。下町にもすっかり慣れたころ、わたしがつい油断しましてね、うっかりいつもしている指輪を外し忘れたんです。それが人目を引いてしまって……おかげで翌朝、真っ青な顔の神官に引き取りに来てもらって、そのまま三カ月ほど監禁状態になりました」

神々しさ全開の笑顔で、昔の悪戯を告白するアマンシールも——当然かもしれないが——大

物である。

意外すぎる上に、心臓によろしくない話を聞く羽目になったナルレイシアは、そっと胸をおさえた。

とても、ふたりのように楽しく聞ける昔話ではない。

（気のせいかしら……胸が、痛いわ……）

あの師匠なら、たとえ相手が柱神だろうと、巻き込んでその手の騒ぎを起こしてもおかしくはないと思えるのだが、巻きこまれた側であるはずのアマンシールの、心から楽しそうな様子が気にかかる。

柱神という存在に対する夢と幻想を、打ち砕かれそうな危機感を覚えるのだ。

（そもそも師匠が神座の方の縁者だったってこと自体、冒瀆みたいなものよね……）

なぜ、あの妖怪がアマンシールと知り合うことになったかといえば、彼がさる柱神の血縁者だったからだというのだ。

ナルレイシアの中の夢と憧れは、すでに風前の灯火となっていた。

しかも、しかもだ……。

（ああ、こんな心臓に悪い思いをすることになるとわかってたら、絶対あのふたりも引きずりこ……違う、同席してもらったのに！）

そう、この屋敷の中庭におけるお茶会の面子はアマンシールとファティ・リンシャとナルレイシアの三人きり。

スカルトードとガスカールはここにはいない。

年長者ふたりに追い払われたのだ。

「四六時中そばにつかれていたのでは、リル・ナーシャも気づまりだろう。まさか、この屋敷が危険だなどと言うつもりはないだろう？　しばらく鏡でも見て、その仏頂面をどうにかしなさい、いいね？」

と、アマンシールがガスカールに言いつけ――それにしても、その際の黒髪の青年の素直さは意外だったが――一方、スカルトードにはファティ・リンシャがにこやかにこう告げた。

「咄嗟に疑われるなんて、日々の不徳のなせるわざですよ。じっくり反省してなさい」

それについては、とんだ嫌疑をかけた自分の方こそ責められるべきだという自覚のあるナルレイシアは、慌てて口を挟んだのだが。

ファティ・リンシャは、どこまでも朗らかだった。

「ほほほ、ナーシアが謝ることはないのよ、でもあなたが気にするようなら……そうね。スカーには選択させてあげましょう」

そうして老婦人が示した選択肢とは――。

酒気いっさい排除兼砂糖たっぷりのお菓子三昧のお茶会同席か。

この屋敷の書庫への入室許可か、だった。

活字中毒のスカルトードがどちらを選んだのかは……言うまでもない。実を言うなら、ナルレイシアも少しだけ（あ、わたしもそっちのほうが……）と思わないでもなかったのだから。

今にして思えば、痛恨の極みだ。

（ううぅ。ごめんなさい、スカルトードさん。二度と疑ったりしないから、どうか、どうかここに来て、このなんとも言えない虚脱感からわたしを救ってー）

ナルレイシアは心から祈ったが、今頃書庫という名の、地上の天国にいる青年の心に届くはずもなく、彼女はそれからしばらくの間、現し世の神の昔話を、否応なく聞かされることとなった。

精神的拷問にも等しい時間が終わりを告げたのは、突然だった。

ひとしきり昔話に花を咲かせていたアマンシールだったが、「……まあ、そういう悪戯ができるようになったのも、国内が落ち着いてくれたからなんだけどね」と、一応の話を結び、じっとナルレイシアを見つめてきたのだ。

「ところでナルレイシア」

リル・ナーシャではなく、ナルレイシアと呼ばれたことで、反射的に彼女はぴん、と背筋を

のばした。

彼女に向けられたアマンシールの眼差しも声も、真剣そのもので、ほんのさっきまでのものとは明らかに違っていたのだ。

「はい」

「カールは……ガスカールは、今回の選定の儀について、君に詳しいことを説明してくれたかい？」

問い詰める口調では決してなかった。

だが、その目で見つめられたら逆らえない……否、逆らってはいけないような気にさせられる……そんな不思議な光をたたえた眼差しだった。

「詳しく……って？」

説明なら、アラマンディから頭が沸騰しそうなぐらい聞いた。

斎王院における生活習慣、各斎王とのつきあい方、また保つべき距離等々……苦労して頭に入れはしたものの、知識と実践は違うことをイヤというほど思い知らされ、悪戦苦闘の日々はいまも継続中である。

が、しかし。

ガスカールになにを教えてもらったかと言えば――。

「ええっと……」
口ごもってしまったナルレイシアの前で、アマンシールとファティ・リンシャ、ふたりがそろってため息をついた。
「やっぱり……」
嘆かわしげな響きが、老婦人の声には宿っている。
「なにをやっているんだか……」
アマンシールは呆れ返ったようにつぶやいた。
なんとはなし、罪悪感を刺激されたナルレイシアは、慌てて言を継いだ。
「待ってください！　ちゃんと……ちゃんとヒントは下さいました！　……と思います。王朝が交代してもディエーンの国名が変わらないのはなぜだと思うって、尋ねる形でヒント、下さったんだと思いますし……あと、斎王さま方の御実家のお使いが躍起になってわたしのところに訪ねてくるのは、王朝開闢がかかっているからだ、とか……」
この言葉に対するふたりの反応は、あっさりしたものだった。
「おや」
「まあ」
あっさりしすぎていて、逆になにも読み取れない。

とてつもない不安感に襲われる。ふたりの淡々とした反応こそが、自分の無力さ、無能さを暴きたてている……そんなふうに感じられた。

ナルレイシアの、『選定者』などという、これまで聞いたこともない立場に置かれて以来、ずっと胸の奥でくすぶりつづけてきた不安と疑念が膨れ上がっていく。

「し、調べたんです！　師匠の家にあった本はほとんど読んでましたけど、でもディエーンの歴史に関するものってほとんどなかったから……」

フィレアの実家には、書庫などなかった。

良妻賢母であることが、女性の理想像とされているフィレアにおいて、書物は男性のものであり、ナルレイシアの活字中毒ぶりを知るにつけ、父であるリンレイドは、自宅から事務所へと、さっさと本を移動させたのだ。

そうした事情でディエーンの歴史に関して、白紙状態だったナルレイシアが、縋れるところは斎王院の書庫しかなかった……わけなのだけれど。

そこでも、みつからなかったのだ。

「わたし、慢心してたんです。読書量に関しては……そこから得た知識に関しては、そこいらの男の人にだって負けないぐらい積んでるって。知識と実践が別物だってことは、もう、イヤっていうほどわかってるつもりだったんですけど、でも、それもとんでもない思い上がりだっ



たんです」

認めるのは辛かった。

けれど、認めなければ新たな一歩は踏み出せないのだ。

「だから、お二人がご存じなら、是非、教えていただきたいんです……この国の柱神さまの世代交代の事情を」

この、彼女の台詞を聞いた瞬間のことだ。

ふわり、とアマンシールがやわらかな笑みをたたえた。

そして、うなずきながらこう答えた。

「もちろんだとも」

銀髪の老婦人は、心底から嬉しそうに微笑んでいた。

こうしてナルレイシアは謎めいたガスカールの言葉の意味を知ることになる。

王朝交代の意味を。

それでいて、常に国名に変化がない理由を。

「王朝が交代しようと、その始祖が同じである限り、ディエーンはディエーンのまま、変わることはないだろうね」

けれど、王朝は変わる。

少なくとも、その可能性は常にある。

なぜなら、ディエーンの始祖の血を引き継いだ者が新たな朝を開いてきたからだ。

「そして、そのきっかけは……ほとんど必ずと言っていいほど……新しい柱神なんだよ。柱神が選ばれた家系の誰かが、新たな王朝を起こすんだ。……毎回必ずとは言えないけれど」

14

「ディエーンの開祖のことは知っているかい？」

アマンシールの問いに、ナルレイシアはこくんとうなずいたものの、すぐに首をかしげてしまった。

なぜといえば、さまざまな書物で取り上げられているものの、ディエーンの開祖――フェルディーダスに関する記述は、諸説入り乱れすぎていて、どれを信じればいいのか、判断に苦しむところが多大にあったからである。

そもそも出生からしてわからない。

当時隆盛を誇っていたカラストン家の庶子だったという説もあれば、逆にその対立勢力だったソヴナント家の猶子だったという説もある。

一番信憑性が高いのは、両家どちらの縁続きでもない、突然現れた麒麟児だったというものだが、それにしてもいま一つ得心できない。

なぜなら、当時のこの地方は、カラストン家とソヴナント家の対立構造こそあったものの、一応の安定を見せていたからである。乱世なら、梟雄の出現もあり得るだろうが、当時、そんな存在が介入できる余地があったとは、ナルレイシアには疑問だったのだ。

もちろん、フェルディーダスがひとの心に巧みに取り入る特技を持っていたとするならば、不可能ではない。

カラストン、ソヴナントの両家に取り入り、その後見をまんまと得たことで、円満に周辺諸公の協力を勝ち得、建国にこぎ着けた……という線も、考えられないことではないが、少し前からナルレイシアのそれは変わりつつあった。

ガスカールに指摘されるまで気づかなかったのだけれど……彼の洩らした「王朝が交代してもディエーンの国名が変わらないのはなぜか」という一言のせいだ。

そして、アマンシールも言った——これまで何度も王朝交代はなされたものの、新王朝を築くのは、常に開祖の血を引く者で、しかもそれには柱神が関係している、と。

それはいったいどういうことなのか。

よくよく考えてみなければならない。

だからナルレイシアは注意深く答えた。

「お名前だけは……。ほかのことについては、説がいろいろありすぎて、どれが本当か、判断

できませんから」

と。

アマンシールは得心がいったようにうなずき、なぜかちらり、とファティ・リンシャに目をやった。対する老婦人は、にっこりと微笑む。

ナルレイシアの脳裏に、疑問符が溢れたが、すぐにそれどころではなくなった。

「ああ、いろいろと伝えられているからね。特に秘密にしておいたわけでもないらしいんだが……まあ、わざわざ吹聴するような話でもないということで、公然の秘密扱いだったのが、結局記述されなかったという話らしいね。ところでナルレイシア、では、暗黒時代以前の柱神については知っているかい？」

脈絡があるとは思えない話題転換に、彼女は思わず眉宇をひそめた。

訝しむの半分、悩むの半分――さて、どう答えたものかと考えこむ。

（そういうこと記されてる書物って、ほとんど禁書扱いされてるのよね。どうしよう……いろいろ読んだけど、どれが禁書でどれがそうじゃないのかわからないのに……）

ここでは、「いいえ、なんにも」と、答えるのが安全なのかもしれないが、しかしファティ・リンシャが同席している以上……そして、アマンシールが師匠である老人の友人である以上無意味なことだ。

師匠のことを友人だと断言する以上、彼が所有していた本のなかに、禁書が紛れこんでいたところで、アマンシールが糾弾する立場に回るとは考え難いが、迂闊な言動は控えるべきかもしれない。

禁書の所有に関しては、神殿法で重罪と定められているのだから。

師匠である老人が、餞にとくれた三冊の書物も、そのあたりのことを配慮して、現代言語に意訳された新版だった……稀覯本には違いなかったけれど。

正直になっても大丈夫なはず……でも、師匠である老人の安全を考えるなら、慎重に振る舞うべき——と、思い悩むナルレイシアに、助け船を出してくれたのは、おっとりとした笑顔が心に暖かい、老婦人だった。

「禁書と呼ばれる書物についてのことなら、心配は無用ですよ、ナーシア。あんなものは、神殿が勝手に作り上げたものですからね。現にわたくしもこの方も所有しておりますもの。大丈夫ですよ」

力強い保証の言葉に、けれどナルレイシアは「はあ」としか答えられなかった。

ファティ・リンシャの言葉が信じられなかったわけではない。

当代の柱神であるアマンシールの前で、そのことを口にするのは、なんとなくきがひけたのだ。

だが、だからといって「わたし、なんにも知りません」は通用しないこと間違いなし。ふと見やればふたりとも、にこにこ笑っておりながら、なにか探るような目をして自分を見ていたりする。

（ひえぇ……神殿で試されたときより、怖いかも……）

緊張のあまり、口のなかが渇くのをナルレイシアは感じた。

「それほど詳しいことを知ってるわけじゃありません……師匠に許しをもらえなかった本もありましたし」

と、前置きしておいて、彼女は知る限りのことを並べたてた。

かつて柱神は最大百八人を数えるほどに存在したこと。その寿命は、人間はもちろん、暗黒時代以降の柱神のそれより遥かに長く、なかには千年近く生きたひともいたこと。次代の選定は各属の第一位から三位にある、いわゆるところの『長老』たちによってなされていたこと。その機構に目をつけた人間の出現により、神具が歪み、柱神の数が半数近くまで減り、暗黒時代が到来したこと……などなど。

（ほかには……うーんと……）

必死に記憶をかき集めながら、ナルレイシアは固く目を瞑った。

「そうだわ！　当時の柱神さまのほとんどは、ご自分の身分を隠して暮らしてらしたんだとか

……。大抵の方はひとの立ち入らない土地に館を設けてらしたけど、なかには気配……というか神気を隠してひとのなかで暮らしてらした……と。そしてそのなかには、人間の伴侶を迎えた方もいらしたとか……確か……」

「なるほど」

と、アマンシールが感心したようにうなずいた。

「ギスカリールの所有してる本のほとんどを読破したというのは伊達ではないね。そこまで整然とした記述は、現存するどんな書物にも載ってはいないはずだからね。それで、恐らく書かれてはいなかったと思うのだが、その伴侶を迎えた方々の二世については、君はなにも考えなかったのかい？」

一応の及第点をもらえたようだと安堵したのも束の間、盲点を突かれてナルレイシアは慌てた。

「え!?　二世!?　……って……」

（二代目のことだから、生まれてくる子供のことよね……）

つい先日まで、柱神は柱神として生まれてくるものだと信じて疑っていなかっただけに、考えたこともなかったことだ。

（だって、神様と人間のあいだに子供が生まれるだなんて……そりゃあ物語ではよくある話だ

けど、あるわけないって思うじゃないーっっ）

「……え、と。あり得ないと思いこんでて、考えたこと、ありませんでした」

内心冷や汗たらたら気分で、正直に答えたナルレイシアに、落胆した様子も見せず、アマンシールは「まあ、そうだろうね」と答えた。

この言葉に、ナルレイシアの頭の一部が反応した。

脈絡のない話題転換――その裏に隠された意味がわかったような気がした。

（もしかして……？）

はっと息を呑み、ナルレイシアはアマンシールを見つめた。

「柱神さまと人間のあいだにお子が生まれるんですか!?」

なぜか、この質問に答えたのはファティ・リンシャだった。

「生まれますとも。柱神さまと言えど、もともとは人間なのですしね。深く愛し合った御夫婦のあいだにお子が誕生なさった例は少なくありませんよ。昨今では稀なことになりましたけれどね」

それはやはり、柱神の数が減ったせいだろうか――それとも、寿命が短くなったせいなのか。

「人間とのあいだに限らず、柱神同士のあいだでも子供は生まれたものらしいね。ただ、そう

やって生まれてきた子供には、深刻な問題がついてまわったという話だ」

アマンシールがなにを言いたいのかはまだわからないものの、どうやら核心に近づいているらしいことを感じ取り、ナルレイシアは首をかしげた。

「深刻な問題、ですか？」

それがなんなのか、想像することもできない彼女に、ファティ・リンシャがやわらかな声で教えてくれた。

「神座にある方々は、ひとの世に属するものではないでしょう？」

ああ、そういうことかと、ナルレイシアは手を打った。

柱神は、ひとの世に籍を持たない。それはその血を引いて生まれた子供に対しても、同じことが言えるのだ――恐らく。

だとしたら……先程からの話の流れからして、考えられることは。

「ひょっとして、フェルディーダスさまは、柱神さまのお子だったんですか？」

よくできました、とばかりにアマンシールが口元を綻ばせた。

「そう……それも、ご両親ともに、だ。お生まれになって間もなく、神具が別の方を選んだせいもあって、ご本人が神座に登られることはなかったが、その資質は王家とその傍流に強く残されることになってね……いくつもの神具が、そのなかから半身を選び出した。君も気づいた

だろう、斎王がみな貴族階級の出身であることに？　さぞ奇妙に思えただろうね」

確かに思った。

選民主義が凝り固まった選出だとさえ思い、内心眉をひそめていたのだけれど……そういうことなら得心がいく。

柱神となり得る資質は、連綿と血縁によって受け継がれてきたのだから。

これこそが、王朝交代が何度起こっても、国名が変わらなかった理由なのだ。

「……つかぬことを伺いますが、次代さまが決まる度、本当に王朝は変わってきたんでしょうか？　だって、神座の方は政治はもちろん、ひとの世には不干渉だと聞きましたけど」

王家の交代など、政治問題中の政治問題ではないか。

そんなものに関与することが、はたして許されることだろうか。

この問いには、さすがのアマンシールも思うところがあったのか、柔和な顔を微苦笑に歪めた。

「もっともな疑問だね。その件に関しては、わたしとしてもなんとかしなければならないと思っているのだが……」

いったん言葉を切り、アマンシールはふと宙を見据えた。

その灰色の双眸に走る痛みの色に、ナルレイシアは胸を突かれた。

「残念ながら、ディエーンがほぼ二世紀ごとに、身内同士で権力争いを演じているのは事実だ。神座についた者にそのつもりはなくとも、家族までそうとは限らないからね。結果として、あまたの血が流されてきた。かく言うわたしがこの座についたときも、ね……」

アマンシールはふと気づいたように、笑顔に戻ったが、ナルレイシアはとても、その表情を信じることはできなかった。

脳裏に甦るのは、先程の彼の言葉――。

柱神の交代がきっかけで、王朝の交代は起こる。

だとしたら、アマンシールが神具に選ばれ、柱神となったときも、王家の交代がなされたということになる。自分がきっかけで、望みもしない争いが起きたとき、彼はどれほど苦しみ悩んだことだろう。

しかも神座についた彼は、自らその争いを止めるためであってさえ、関与することは許されなかったのだ。

それはどんなに悔しく歯がゆいことだったろう。想像するだけで、胸が痛くなる。

「アマンシールさま……」

思わず声をかけたナルレイシアに、彼はなんでもないと言わんばかりに殊更やさしい笑みを向けてきた。

「悔やまれてならないのは、わたしの力不足だよ。わたしの味わった苦しみなど、実際に争いに巻きこまれ、血を流し、家族を失った者たちのそれに比べれば、本当に微々たるものだ。あんなことは、二度と繰り返してはならないと……二度と血を血で洗う争いを起こしてはならないと、固く誓って今回のことを諮ったつもりなのだが、ひとの心ばかりは、計算通りにはいかないものだね」

唇から洩れ落ちる息は、どこまでも深く、重かった。

「斎王たちを、みな王家の養子にし、実家と王家と二重に縁をもたせることで、これまでの呪縛を断ち切ろうと思ったのだけれど……殊のほか、みな執念深くてね。国主になるのも、そのきっかけになるのも、あまり素晴らしいこととも思えないのだが、そうは思わない面々が存外多そうで……少しばかり気が重いね」

アマンシールの言葉の半分は理解できなかったが——政治中枢に位置する面々など、顔をあわせたことも、それどころか見たことさえない身としては当然のことである——、もう半分には実感をもってうなずいたナルレイシアだった。

(某公爵家出身の某斎王さまとか、某伯爵家出身の某斎王さまとか、特にそうよね。ひとのことはなから馬鹿にしてて、それでいて恩きせがましい提案とかしてきてくれちゃって)

それに比べれば、ちょっと我が儘ではあるものの、旺盛な好奇心のままに、栗の毬による染

色の過程を見たいとか、焼き栗ってどんな味？　と、ねだって大騒ぎの原因になった、某侯爵家出身のセリアラのほうが、よっぽど善良である。

たとえ、騒ぎの原因を、全部ナルレイシアに押しつけて、自分は悪くないと主張したとしても……だ。

まあ……実家勢の野心は、どこも似たりよったりではあるけれど。

しかも、ササンシールやユーカリィヤの忠告通り、ここ数日の各家からの使いの口調には変化が見え始めている。

ほんの数日前まで、ひたすらこちらにとって美味しい条件ばかり提示していた面々が、少々脅しめいた言葉を含ませるようになってきた。

すなわち、「お父さまをお困らせになるものではありませんよ」というのがそれだ。

天啓が誰に下ろうと、そんなものは無視して、自分の推す斎王を選べ――と言いたいらしいが……そんなことをして、割りを食うのは一方的にこちらばかりだ。不正で選ばれたところで実際に神具が認めないことには、話が先に進まないことぐらい、わかっていそうなものなのに、取り敢えずなんでもいいから選ばせた者の勝ち――という考え方は、ナルレイシアには理解不能な代物だった。

もっとも、そんな理不尽な要求を前にした場合、俄然、生来の負けず嫌いのたちがふつふつ

と燃え上がる彼女の性格もまた、彼らには理解不能だったろうが。

それまで、彼女は彼女なりに悩んでいたりしたのである。

斎王は五人――その中からどうあってもひとりを、神具に選ばれたひとりを選び出さなければならない、と。

それが正しいことなのだと、思って……いや、信じようとしてきたのだけれど。

アマンシールの話を聞き、その様子を見ているうちに、そうではない……そうとは限らないのではないか、という思いが湧き起こってきた。

……それでも、やはりためらいは生じる。

「あの……これまで、斎王に選ばれた方以外の方が神座につかれた例は、あるんでしょうか……？」

恐々と尋ねた彼女に、アマンシールは無情な答えを返す。

「いや？　少なくともディエーン建国以来、そうした例はなかったはずだと記憶しているんだが……？」

言うと同時に、彼の灰色の双眸が瞠られた。

すかさず割って入ったのはファティ・リンシャだった。

「あら、クッティーシャでもワラデスでも、そうしたことは珍しいことではありませんわよ？

ディエーンぐらいですもの、選定者ががちがちの頑固者の老人ばっかりだなんて。よそは大抵、もっと若くて体力自慢の子が選ばれるものですよ？　そうしてこの子が選ばれたのですもの、アマンシール、あなたはもっと、素直に喜んでもいいのではないの？」

二百年以上生きているはずの……しかもこの世を支える至高の存在であるはずの男性は、珍しくも口ごもり。

見つめられるだけで、心の奥底まで見通されてしまうような眼差しを、彼女に向けてきた。

「リル・ナーシャ。わかっているのかい？　きみの先程の告白は、斎王を出した全家を敵に回すものだということを。それをわかっていて、それでもなお、君は主張するつもりなのかい、選ばれた斎王のなかに、次代はいない、と……？」

真剣を喉元につきつけられたような迫力だった。

アマンシールはただ彼女を見つめ、問いかけただけだったというのに！

恐ろしかった。

気迫だけで殺されるのではないか、と思った。

けれど、嘘だけはつけなかった。

「は、い……」

震える声で、懸命にうなずいた。

黄神神殿で、答えを強いられた時以上の圧迫感に押しつぶされそうになりながら。

ややあって、アマンシールはつぶやいた。

「なら、仕方ないね」

と――。

15

夢なのに……これは夢だとわかっているのに、胸がどきどきしていた。
心を支配する感情は焦りと恐怖――どうして、と彼女は思った。
これは普通の夢ではない、特別なもの。
それでいて初めてではない、時々見る……あの、夢。
どきどきしているのは自分の胸ではない、あの子なのだ。
(でも、どうして!? あの子がこんなに怖がるようなことが起こったというの!?)
ときどき、鏡を見ていると、自分の顔なのに、そうでない誰かに見つめられているような、奇妙な感覚を覚えたのは、物心ついて間もなくのころだった。
不思議だとは思ったけれど、それは決してイヤな感じのするものではなかったから、彼女は誰にも相談しなかった。いや、一度だけ、母に打ち明けたことがあったのだけれど、そのときの母が見せた嬉しそうでありながら、それ以上に悲しげに見えた顔を目にして以来、口にする

ことはやめたのだ。

夢を共有するようになったのは、もう少し大きくなってからだった。

三つになる前に、大病を患ったのが原因で、病気がちになってしまった自分とは違い、あの子は元気そのものだった。

着るものは絹ではなかったし、敷布や布団もごわごわして、思わず肌を心配してしまうものではあったけれど、あの子の肌は陽に焼けていてすごく丈夫で、羨ましいと思う以前に驚いたぐらいだった。

夏の日差しを浴びても平気で、焼けた皮膚をぴりぴり剝がすさまを見たときなどは、信じられない思いだった。

健康で、元気で、季節や天気に関係なく、どこにでも出かけられるあの子。

自分にはできないことばかり——。

羨ましくて——本当はちょっと妬んでいた。だって、どんなに綺麗な服を着ていても、柔らかい布団に包まれていても、あの子みたいに真夏の海で遊んだり、真冬に外で雪ダルマを作ったりはできないのだから。

でも、その一方で、あの子のすることすべてが新鮮で、楽しかった。

一度も会ったことのない、自分にそっくりな、あの子。

けれど、いまとなっては自分に一番近い、あの子。
あの子にだけは、いつまでも元気で安全でいてほしかった。
なのに――。
あんなことが起こってしまったせいで、あの子の生活は一変してしまった。
(それでも……必ず会おうねって誓いあったのに……！　だからいまは我慢するって、あの子は言ってくれたのに……!?)
どうして、あの子がこんな思いを味わっているのか。
こんな恐ろしい……こんな、全身が凍りついてしまうような恐怖を。
夢のなか、あの子と同化している自分が、はっと息を呑む。
耳に届くのは、近づいてくる、大人の足音……それも、ひとつではなかった。
周囲に目をやれば、それはここ最近見慣れた屋敷とは全然違う、薄汚れた路地である。
息を詰めて、足音が遠ざかるのをひたすらに待った。
怖くて怖くて、もう一歩だって歩けないぐらいだったけれど、足音が聞こえなくなるのを待って、あの子はそろりと身を起こした。
「……行かなきゃ……ユウリ……」
つぶやく声には、思い詰めた響きが宿っていた。

「……っっ！」

届くはずのない、自らの声で、彼女は目覚めた。

寝台から起き上がり、彼女は震える体を抱きしめる。

そうしてつぶやく――あの子の名を。

「……リオ……っっ！」

窓の外の空が、そろそろ白んでくる夜明け前。

アマンシールとファティ・リンシャに対面し、色々と話を聞かされたナルレイシアは、結局一睡もできないまま……。

悩んでいた。

寝台の中で、悶々と……ひたすら悶々と悩みつづけていた。

原因は、言うまでもない、次代選定のことだ。

候補であるはずの斎王のなかに、そうと思われる人物がいなかったことは、実は大変な重荷だったのだが、いまでは少しだけ気が楽になっていた。

さすがにそんなことは、誰にも相談できないと思っていたのだけれど、アマンシールとファティ・リンシャのふたりに会えたおかげで、しかもそのことを口にしたことで、本当に少しだけだけれど、心が軽くなったのだ。

もっとも、同時に別の問題が生じたわけだけれど。

（候補のなかに次代さまがいないだなんて言ったら、きっと神殿とか斎王さま方の御実家のほうとか、すごい騒ぎになるわよねえ……）

一番考えられるのは、「やはり彼女は選定者ではないのだ」論争の発生だろう。前回の不愉快な試験では、もともと斎王でない者たちばかり集めた場における「ここにはいません」発言だったのだが、今回はわけが違う。

正真正銘の斎王各々とつきあった上で、こんなことを言い出したら……それはもう、大騒ぎにならないほうがおかしい。

（前例なし第三弾だわ。さすがにここまでくると、我ながら疑われても仕方ないかも……って気にもなってくるわよね）

アラマンディに相談するべきかとも思ったのだが、それはアマンシールとファティ・リンシャに、やんわりと、だがきっぱりと却下されたのだ。

「やめておきなさい、彼は多少……結構……いや、かなり、融通のきかないところがあるひと

だから」

そんなことになったら、大騒ぎになってしまうだろうことは確実だから、とはアマンシールの弁。

「そうよ。生真面目で頑固なことは、彼の美点であると同時に欠点でもあるわ。黙っていたところで、誰かが損をするわけでなし、もうしばらくは知らん顔をしてなさいな。嘘も方便、とは少し違うけれど、なにもかも正直に振る舞うのが正しいとは限らないのですからね」

春の陽射しのような笑顔で、とんでもないことを言うものである。

だが、ナルレイシア自身、このことが知れた場合に起こる騒動を、多少は想像できたこともありうなずいておいた——後にそんなものは全然想像の内に入らないことを痛感させられたのだけれど。

しかし、そうなるとしばらくはいいとして、やがて避けられない問題が持ち上がってくることになる。

斎王のなかに次代がいないというのなら、本当の次代となるべき人物はどこにいるのか、ということだ。

……頭の痛い問題だった。

(そうなると、やっぱり、わたしが探索の旅に出ることになるわけよねえ……)

この、とんでもないトラブル体質の自分が。

不幸中の幸いの権化という異名は伊達ではない。想像を絶するトラブル続きの旅になることは間違いない。

（嵐に襲われたり、土砂崩れに巻き込まれたり、橋が落ちたり、盗人に狙われたり……？　あと、川に落ちたり、蛇が降ってきたり、蜂の大群が襲ってきたり……とか？）

余人が聞けば、気の回しすぎだと笑い飛ばしそうなことばかりだったが、一度ならず体験したことばかりある身としては、到底楽観視できない。

「えーっと、蛇に嚙まれた場合は、まず傷口から毒を吸い取って……」

「おい」

「厄介なのは蜂毒のほうかな？　蛇と違って、一度刺されたことあるし……二度目だと体が過剰反応示して死ぬこともあるって話なのよねぇ……」

「……おい」

「あ、山の中を歩くときには虻にも気をつけなきゃいけないんだわ。あと、蚋にも。なんでか刺されやすいみたいだし……」

やはりフィレア時代、山中で虻や蚋の猛襲を受け、露出していた部分はもちろん、服の中にまで侵入され、死ぬほど痒い思いを味わわされたことを思い出す。

少なくとも蚊嫌草は必要不可欠よね……などと思いを巡らせていたナルレイシアの耳に、不機嫌この上ないとわかる、ガスカールの声が飛び込んできたのは——正確には、ようやく気づいたのは、だが——次の瞬間だった。

「……おいっ」

先々の不安材料の多さに、ため息をつきつつも前向きにあれこれ検討していたナルレイシアは、この突然の声にはっと息を呑んだ。

扉ごしとはとても思えぬ近さに驚いたのだ。

はたして、顔をあげてみると、扉を開いて、ガスカールがこちらを見つめていた。

ここは寝室なのに、である！

「か、仮にも女性の寝室の扉を、ノックもなしに開けるだなんて、無礼にもほどが……！」

憤慨して抗議しようとする彼女に、ガスカールはずい、と指を三本立てて見せた。

「三回」

意味がわからず、つい首をかしげてしまった彼女に、黒髪の青年は、淡々と——彼女にとっては有利とは言い難い——事実を披露してくれた。

「三回はノックした。返事がなかったから、非常事態を考え部屋に入らせてもらった。そうしたら寝室から、なにやらぶつぶつつぶやく声が聞こえてな。場所が場所だけに、念のためまた



三回ノックしたんだが、それでも返事がなかったものでな。悪いとは思ったが、扉を開けさせてもらった。さすがに寝室に足を踏み入れるのは遠慮したんだが、三度目の呼びかけに反応しないようなら、熱にうなされている可能性大として、医者を呼びに行かせるところだった」

律儀というより厭味っぽく、きっちり回数を告げる青年の言葉に、ナルレイシアはさすがにしまった、と思った。

昔からの困ったくせで、なにかに熱中しすぎると、声をかけられても気づけなくなるのだ。

思わず「うう」とうなってしまう。

「そ、それはお手数を……」

一応謝罪することで、ことを穏便にすませようという彼女の思惑は、しかしその気皆無としか思えないガスカールの態度によって見事に外れた。

「まったくだ」

夜着のままでなかったら、絶対寝台を飛び出して平手のひとつも見舞っていたところだと、ナルレイシアは思った。実はそうしかけて、すんでのところで夜着姿の自分に気がついて思い止まったわけなのだけれど。

「それは悪うございましたね。だけど、いったいなんの御用なわけ!?」

つい喧嘩腰になってしまうのは、もはや条件反射である。

噛みつくような口調のナルレイシアに――これがまた、相手にならないとでも言いたげで腹立たしいのだが――ガスカールは端的に用件のみを伝えてきた。

「わたしではない。異例ながら、おま……貴方に面会したいと駆け込んでらした方がいるらしい」

（お前と呼びかけたわね、この男）

頭の固さが筋金入りなのは、どうやら確認するまでもないらしい。

全然ありがたくない方向における証明ではあったけれど。

だが、しかし――。

告げられた内容の意外さ……あるいは異様さに、ナルレイシアはさっと顔を引き締めた。

「面会……？　こんな時間に……？」

彼女自身の希望もあって、遮光効果の少ないカーテンを通しても、光はまだ弱すぎるほど。

こんな時間に「普通」の用件で訪れる客はいない。

緊急事態ということだ。

「誰!?」

鋭く問いかけながら、彼女は勢いよく寝台から身を起こした。

ガスカールの姿はすでに、扉の近くにはなかった。

だが、声が聞こえるぐらいのところには陣取っていたらしく、すぐに答えが返ってきた。
「ユーカリィヤさま……だそうだが、どうする？」
「そんなの、会うに決まってるじゃない！」
叫ぶと同時に、ナルレイシアはタンスに駆け寄り、優雅さより洗練さより美しさより――ただひたすらに着付けが簡単な衣装を選び、引っ張りだした。
そうして、だ。
この異様な面会者と会うために、応接室に足を運んだナルレイシアが目にしたのは、数日前に会った、常に諦めの光を宿していた子供とは別人のような、焦がれる目をした少女だったのである。
「ナルレイシアさま！」
いまだ本調子ではないはずの体で駆け寄って来、彼女はナルレイシアにすがりつかんばかりの勢いで、自らの願いを口にした。
「お願いします……リオを……あの子を！　どうか……どうか、お願いしますから！」

16

「……オースリン家のご令嬢……ですか？」

呼び出され、協力を要請されたスカルトードは、それはそれは美しい顔に、でかでかと「初耳」と書いて問い返してきた。

「ユーカリィヤ嬢以外に、侯爵にご令嬢がいらっしゃるとは、寡聞にして存じませんでしたが……本当に？」

疑っているわけではないが、訝りの色が濃い。

無理もない反応だった。

（わたし……はともかく、親戚連中も知らない話だってことだからなぁ。よっぽど厳重に隠したってことよね）

誰がか、といえば、オースリン伯爵家前当主である、ユーカリィヤの父親がである。

「双子だったんですって。上に跡継ぎになれそうなお兄さんなりお姉さんなりがいたら、一緒

に育てられてたかもしれないけど……もしくはどちらかが男の子だったら、問題視されることもなかったって話なんだけどね」

そこまで説明した時点で、スカルトードは「なるほど」とうなずいた。

室内にはもうひとり、黒髪の仏頂面した青年が同席していたが、こちらはうんともすんとも口を開かない。

「オースリン家では、確か何代か前、双子の兄弟の間で後継者争いが生じたことがあったはずですね。血を血で洗う争いが長引いたせいで、身代が傾きかけたとか。そういうことなら、生まれた子供のひとりを里子に出すのもうなずける」

「そういうことらしいのよ。で、そのことはもちろん、秘中の秘扱いで、ユーカリィヤのご両親は、信用のおける家人以外にはそのこと話してらっしゃらなかったそうなんだけれど……」

「それはそうでしょうね。あの面々がそんなことを嗅ぎつけたら、とてもではないが収拾のつかない事態大連発だったでしょうから」

しみじみとうなずくスカルトードの眼光が……怖かった。

「……もしかして、スカルトードさんとこにも、なーんか不愉快ーな話とか、持ちかけてきた、とか？」

恐る恐る尋ねると、神々しい美貌の主は、やはり神々しい笑顔で「ええ、まあ……辟易して

しばらく屋敷に寄りつきたくなくなるぐらいには」と答えた。
それはやはり、自分とのつきあいに目をつけられたせいだろうか——と思うと、心から申し訳なく感じると同時に、冷たい汗が背筋を流れるような錯覚に見舞われた。
先日のガスカールとの笑顔対決を目にして以来、ナルレイシアのなかにはしっかりと、スカルトード＝その気になると、とっても怖いひと、という図式が刻みこまれている。なまじ人外魔境の美貌を誇っているだけに、あのときの声、笑み、眼差し……すべてが融合した結果である、あの恐ろしい緊張感に支配された空間は、到底忘れられるものではない。
（ひゃー、なに言ったんだろう、そのひとたち？　ちょっと知りたいけど、でも怖すぎるから訊くのよしとこうっと）
ナルレイシアの脳裏には、故郷フィレア在住の、恩師の教えのひとつが浮かんでいた。
触らぬ神に祟りなし、だ。
（話題、変えよう！　や、全部変えたら話が進まないから、せめて方向性だけでも！）
「あ、あのね！　なのにユーカリィヤは物心ついてしばらくたったころには、その子のことを感じられるようになっていたんですって！　双子って、不思議よねえ……わたしも兄姉いるけど、鏡のなかに自分じゃない誰かの視線を感じたり、夢で相手の体験を一緒に感じたりしたことなんかないもの」

不運に愛されていることと、それでも最悪の事態には陥らずに済む程度の幸運を与えられていることを、身をもって知っているナルレイシアの感覚は柔軟だった。

「しかし、お話を聞く限り、そのご令嬢が現実に存在するという証拠はないように思いますが……？」

そんなもののために力を貸せと言われても――とでも言わんばかりの光が、美しい灰緑色の双眸に宿っている。

もっと腹立たしいのは、先程から知らんぷり攻撃をつづけているガスカールの瞳にも、同じ光が見えることだった。

（なんだってこの二人は！　こんなところでだけ意気投合するのよ!?）

歯がゆく思いつつ、彼女は言を継いだ。

「証拠に認められるかどうかは知らないけど、それらしい子なら、わたし見たことあるわ」

この言葉の効果は絶大だった。

スカルトードもガスカールも目を大きく瞠り、彼女を振り向いたのだ。

「どこでです!?」

「いつだ？」

（あからさまに実体じゃなかったんだけどね）



とは声には出さず、ナルレイシアは注意深く言葉を選んで答えた。

「こちらに上がる直前だったわ。ユーカリィヤさまにそっくりで……というか、その子にそっくりだったから、ユーカリィヤさまを初めて見たときは驚いたんだけど。追い詰められた目をしてた。それで、助けて、って言って……でも、すぐにいなくなっちゃったの」

正確には、彼女の目の前で煙かなにかのように消えてしまったわけだが、これも内緒にしておくことにする。

なにしろあの子供が現れた場には、スカルトードも同席しており、しかも彼やアラマンディの目には、その姿は映らなかったようなのだから。

「髪を短く切ってて、身につけてる服も男の子のものだったわ。でも、とても愛らしい繊細な顔だちだったから、はたしてどっちだろうって思って、それもあって記憶に焼きついたのよね……そうしたら、そっくりなユーカリィヤさまには会うし、挙げ句にこの相談事でしょう？間違いないとまで言い切ることはできないけれど、ただの偶然と切り捨てていいこととは思えないのよ」

ナルレイシア本人としては、すでにすっかりユーカリィヤからの相談を受け、解決に向けて動く気満々だった。

しかしここで問題がひとつ……否、いくつか。

選定結果発表の日まで、ナルレイシアはこの斎王院から外出することが認められていないこと――先日の外出は、アマンシールによる超法規的措置とも呼べるもので、本来なら実現するはずもないことだった――ロスタロイド周辺に関する情報と知識が、絶無状態に近いという現実。

これでは、なにかしたくとも出来やしない。

そこで考えたのが、共犯……もとい、協力者作りなのだ。

本の虫同士であるスカルトードには、さんざん世話になった上、迷惑もたっぷりかけた自覚もあったが、指輪押しつけ犯を網にかける際の手腕の見事さを思い出すだに、是非とも引っ張りこまねば……いや、協力を願いたいと思った。

ファティ・リンシャの知人であるばかりでなく、アマンシールからの招待の使者に選ばれるひとであるなら、次代の柱神の問題にも無関心ではなかろうと……現に、神具『黄昏の黄金』と呼ばれる指輪が見つかるなり、ナルレイシアを黄神神殿に引っ張って行った前歴を思えば、親身になって相談にのってくれるのではないか……と、思っていたりしたわけだが。

どうも見た感じ、親身にまではなっていないような感じだ。

（うーん、いざとなったらお師匠の本を餌にしようと思ってたんだけど、ガスカールがそばにいたんじゃちょっと無理そうね。だとしたら、話の持って行き方をよくよく考えなくっちゃ）

斎王たちの実家から送られる賄賂のたぐいには、怒髪天をつくほどの怒りを見せていたくせに、自分はちゃっかり同じような手を使おうとするのは、なにもナルレイシアが厚顔無恥なせいではない。

彼女のような活字中毒者にとって、読んだことのない本とは、子供が大好きなお菓子のようなものなのだ。そして同類であるスカルトードにとっても同じであることは、数日前のアマンシール邸での出来事で、すでに確認済みである。

別に不正を働くわけではないのだし、スカルトードに対しても「手伝ってくれると、本当に嬉しいなぁ。もし手伝ってくれるなら、お師匠さまにお願いして、何冊かしばらく貸してもらえるよう手紙を書いてもいいかなぁ」ぐらいの提案をするつもりだったのだ。

だが、ぴたりとそばから離れないガスカールがいる以上、その手は使えそうにない。

だとしたら、だ。

「ユーカリィヤさまもそう頻繁に交感できてたわけではないらしいから、大雑把なことしかわからないらしいんだけど……ユーカリィヤさまが斎王に選出されてしばらくしたころに、その子リオって子の家に見知らぬ男たちがやってきて、実のご両親がお待ちですとかなんとか言って、連れ出したんですって」

夢における交感というものに、どこまで信頼を寄せていいものか、悩む顔でスカルトードが

問い返してきた。

「ですが、それは、一人娘であるユーカリィヤ嬢が斎王に選ばれたがために、ご存命中のオースリン侯爵が命じられたことでは？」

双子は争いの元になるからひとりは里子に出しておきながら、手元に残した子供が次代柱神候補に選ばれたとたん――たとえ次代さまとはなれなくても、オースリンの籍に戻れないからといって――ならば手放したほうの子を引き取ろうとは、かなり勝手な話である。

だが、家督相続争いを避けるため、泣く泣くわが子を手放した両親としては、無理からぬ行動だったのかもしれない。本音を言うなら、きっとふたりとも一緒に育てたかったに違いないのだから。

（おまけに、親族連中アレだし）

オースリン家の紋章入りの指輪やブローチ、首飾りもあった。

頭が悪いにもほどがある。もしナルレイシアが受け取ったとして、それがひとの目に触れたとしたら、どう言い逃れするつもりだったのか。

だから、ナルレイシアとしても、ユーカリィヤの双子の少女を、オースリン侯爵が引き取るための手配をしていたことまでは否定しない。というか、あり得すぎて、とてもできない。

「それはわたしも考えたわ。だって、一番あり得そうな話ですものね。でもね、彼女はオース

リンの本宅にも別宅にも姿を現してないの。しかも彼女に迎えが来た時点には、オースリン侯爵夫妻は事故で亡くなっていたのよ」

もちろん、彼女の存在は公にされないままに。

「なのに、迎えが来た？」

眉をひそめる反応を示したスカルトードに対し。

「馬鹿らしい。しょせんは夢物語だろう」

と言い捨てたのは、それまで会話に加わろうともしなかったガスカールだった。

頭から馬鹿にしきったその物言いに、ナルレイシアはかちんときた。

現実的根拠のない話のつみ重ねである以上、そう言われる覚悟はつけていたはずだった。

だのになぜ、彼に……ガスカールに指摘されると、こうも腹立たしく感じられるのか。

（きっと、わたしとこの男は、生まれる前から定められた天敵に違いないんだわ！）

でなければ、このことあるごとの衝突は説明できない。

では、どうすべきか。

素早く彼女は考えを巡らせ、やはり素早く結論を出した。

（放っておいて、無視しとこうっと）

後に邪魔させないための、とっておきもあることだし、ここはスカルトード引き入れに集中

すべきだと判断した。そうでもしなければ、いちいち彼の言動に引っかき回されて、とても初志貫徹できそうにない。

「迎えは来たのよ。でも、ユーカリィヤの双子の妹は、オースリン本家に辿りついていない。この先のことは、ユーカリィヤさまが夢で見た夢物語に過ぎないから、証拠もなにもないただのおとぎ話かもしれないけど」

厭味たっぷりに言って、ちらりとガスカールに目をやったものの……残念ながら効果はなかった。

（なんって可愛げのないひとなの!?）

とは思ったものの、まずは話を進めるのが先だと心を引き締めた。

「ユーカリィヤさまの曖昧な夢のなかで、彼女の双子の妹にあたるひとは、養い親の元からどこかに連れて行かれて以来、表面的には素晴らしく贅沢な毎日を過ごすことになったらしいのよね。絹の、火熨斗の当てられた敷布だとか、極上の絹のひらひらした衣装とか……とにかくそれまでの暮らしの中では想像もつかないような贅沢なものばかりに包まれて……でも、その内気づいたのですって。窓には飾りにしか見えないけれど、頑丈な鋼鉄細工の格子が施されているし、部屋を出ようとするだけで用件を聞かれるし、庭を散策するときなんて、おつきはひとりかふたりでも、始終複数の視線を感じた、とかね。もちろんユーカリィヤさまが夢でみた

ことばかりだから？　信憑性がないと言われたら反論できないわけだけど？」

ナルレイシアのこの台詞に対し、スカルトードは居心地の悪そうな表情になった。

しかしガスカールは……見ているこちらのほうが、逆に腹立たしく思うほど、落ち着きはらい、平静そのものだった。

（あー、なんか悔しい）

一泡ふかしてやりたいとは思っても、これから協力要請しなければならないことを考えると、それはできない。

機会さえあれば、絶対是非ともやりたいことではあったが、いまはそれどころではない。

「厭味たらしいな」

仏頂面のまま、ガスカールがそう言うのに対し、スカルトードも――これはまったく別の意味だとわかる配慮を示してくれたのだが――うなずいた。

灰緑色の双眸に浮かぶ「大丈夫だよ」とでも言いたげな光に後押しされた気分で、ナルレイシアは爆弾を投げ込んでみる気になった。

確かに賭けではあったけれど。

この膠着状態をどうにかするには、思い切った一手を打つ以外ないと……そう信じ、実行したのだ。

ただし、あくまで小声でこそこそと、だ。

「あのね。ふたりが揃って気が乗らない様子なのはわかるんだけどね。ひとつだけ、言っていい？　リオって、その、いま行方の知れない子なんだけどね。攫ったとおぼしき相手に、結婚を申しこまれたんですって」

ここで、スカルトードとガスカール、両名の耳がダンボになってしまったのは、自己責任としか言いようがないだろう。

17

「ユーカリィヤ嬢の双子の妹御ということは、その少女は十三歳ということですよね」
スカルトードが小首を傾げながらつぶやくのに、ナルレイシアもうなずいた。
政略結婚なら珍しくもないのだろうが、略奪される花嫁としては微妙な年齢だからである。
「それで、その情熱的な求婚者は何者なのですか？」
取り敢えず好意的に解釈してみることにしたらしい青年に、ナルレイシアは軽く肩をすくめた。
「ユーカリィヤさまも、そこまではご存じじゃなかったわ。だけど、もしかしたら当人は直接リオさまの前に姿を見せていないのかもしれないと仰ってた。いつも贈り物にカードが添えられてて、そこに『未来の花嫁に』とか『我が運命の伴侶へ』とか書かれてたそうだから」
その話を聞いたとき、ナルレイシアは、それが恋ゆえの言葉でないことを直感した。
「恋い焦がれて攫ってきたにしては、なんだか妙だと思うのよね。相手の心が欲しければ、ま

ずは姿を見せて、強引な手段に訴えたことを謝罪するものじゃないかしら？　まあ、自分に自信がなくて、対面を尻込みしてって線も消せないわけじゃないけれど、だとしたら非常識な行動と、どこか結びつかないのよねぇ……」

「確かに」

と、スカルトードも相槌を打った。

「騙して養家から連れ出した挙げ句、監禁状態に置いて、しかも顔も見せず、カードの言葉にもあまり愛が感じられないとなると、あまりロマンティックな動機とは思えませんね」

そうなのよ――と、力強くうなずきかけたナルレイシアに水を差すように、ぼそりと口を挟んできたのはガスカールだった。

「そうとも言い切れまい。世の中には、自分の思い通りにならないことはまずないと思いこんでいる人間もいるものだからな。そうした輩は、自分の優位を揺るがせぬために、下手に出ることを知らぬものだ。身分が高ければ高いほど、顕著に現れる傾向だがな」

（まったく、この男ときたら、ああ言えばこう言うっていうか、口が減らないっていうか）

むかむかむかっときたけれど、確かに見落としていた可能性ではあったから、ナルレイシアは考えこんだ。

（確かにあり得ない話じゃないわよね……特に身分の高い馬鹿その一あたりなら、大いに考え

られることだわ。でも、それは……）

「打算が絡んでた場合でも、言えることよね」

「打算、ですか？」

スカルトードの問いに、彼女はこくりと首を縦にふった。

「つまり、誘拐者はリオ嬢自身が目当てではなく、彼女を娶った場合についてくるなにかをこそ目的にしていると？」

だとしたら、一番考えられることは、オースリン侯爵家の財産と領地狙いという線だ。

「だけど……それだとリオさまのことをいまでも明らかにしてないのが不思議なのよね。内密に里子に出したってことは、リオさまがオースリン家の家督を引き継ぐためには、色々と面倒な手続きが必要なわけでしょう？　戸籍の修正申請や、財産相続のための権利取得の申請や、間違いなくリオさまがオースリン家の直系だと証明するためには、証人だって複数必要だろうし、そのためには法務庁に証人申請の許可を貰う必要があるわけよね」

ところが、カードの送り主である人物が、そうした動きに出た様子はない。

もしそんな事態が持ち上がれば、あの騒々しくもかなり不愉快な親族の面々が、気づかぬはずはないと思われるし……なにより、事情通らしいスカルトードとガスカールがふたり揃って――いや、ガスカールは眉唾ものだと話半分に聞いている様子なのだが――初耳というのはど

うにもおかしい。
どう考えても、問題の人物は、ひっそりこっそり攫ってきたリオを閉じ込めていただけとしか思えない。
だったら……彼女が受け継ぐ権利を持つ財産以外のなにを、その人物は欲しているのか。
どうしてもそれがわからない。
いや、実はたったひとつだけ、思い当たることがないでもないのだが、それは軽々しく口にしていいものではない。
選定者としての義務にも関わることだからだ。
（とはいっても、他に考えられそうなことってないのよね……）
ガスカールはもちろん、乗り気でなさそうなスカルトードを味方に引き入れるためにも、ここは話しておくべきかもしれない。
「……ねえ。王家の交代劇のことなんだけど、これまで柱神さまのお身内が新たな王に立たれたという話だけれど、それって……その、血の繋がった方ばかりなの……？」
ぴくり、とガスカールの眉が不機嫌に震えた。
鋭い視線を向けて来、低く問い返してきた。
「どういう意味だ？」

（ひー、突き刺さりそうっっ！）

背筋に冷たいものが伝うが、ここで怯んでは話が進まない。

「だから、お身内の伴侶の方が王に立たれたこととかって……」

ガスカールの返答は簡潔だった。

「ない」

がっかりしたナルレイシアである。

（そうか、ないのか……じゃあ、その線は消えるのか……）

これなら筋が通るかと思ったのだが、きっぱり否定されてしまっては仕方ない。

だが、このやりとりに興味を惹かれたらしいスカルトードが口を挟んできた。

「ちょっと待ってください。ディエーンでは例がないかもしれませんが、他国では確か、そうした例はあったと思いますよ。神座の御方の姉君を娶られた方が……ああ、なるほど、そういうことですか。考えられないことではありませんね。歴史にある程度通じた人物なら、そうした前例を知っていたとしてもおかしくはありませんし、そういうことなら、斎王さまを出してない家柄が怪しくなりますね」

しかしこれも、ガスカールによって一刀両断された。

「馬鹿馬鹿しい！　そんなことを大まじめに考える馬鹿がどこにいるというんだ!?　第一、そ

んなことをしても、確率は五分の一なんだぞ、賭けるには分が悪すぎるだろうが」
「でも、斎王さま方の御実家は、大まじめにその賭けに没頭してらっしゃるみたいだけど？」
「そうそう。特に野心という名の鱗を目に張り付けた方々というものは、少々冷静な判断力に欠けるところがありますからねえ。それに、斎王選出の際、ユーカリィヤ嬢が最も資質的には優れていると、神殿内でささやかれていたそうですし」
　一考の価値はあるのでは？　と、話をつづけるスカルトードに、ガスカールが忌ま忌ましげな視線を投じた。
「どこから聞いてくるんだ、そんなこと」
　その口調が苦々しげであることから察するに、そうしたことは極秘扱いされるものらしい。当然といえば当然である。事前にそのような情報が飛び交っては、目も当てられない騒ぎに発展するのは明白なのだから。
「小耳にはさんだだけですよ」
と、すまして答えるスカルトードを見ながら、ナルレイシアは（このひとの場合、すでに情報通って言葉だけじゃ片づけられないかも）と思った。
　とはいえ、せっかく話題がこちらの望む方向に転がってきたのだ、再びガスカールに断ち切られたり横道に逸れたりしない内に、と慌てて割って入った。

「じゃあ、その噂を耳にした誰かが、賭けに出たっていう可能性も――」

ありますよね、とつづけようとしたナルレイシアに、ふたりの青年は同時に答えた。

「あり得ない」

「無理ですね」

ばっさり切り捨てられてしまったナルレイシアは、（だから、どうしてこのふたりってば、こういう妙なところで意見一致させちゃうのかな）と心で泣きながら思った。

「どうしてですか？　いくら箝口令が敷かれていても、ひとの口に戸は立てられぬって格言通り、完全に隠し通すのは無理でしょう？　わたしにせっせと賄賂送ってきた方々も、情報収集には余念がないでしょうし」

神官全員が――本来ならそうあるべきなのだが――清廉潔白なわけではないだろうし、なかには誘惑に駆られて口を滑らす者が出たとしても、おかしくはないはずだ。

「そりゃあ、そうした方々は熱心なものだよ。でもねえ、秘密厳守の誓いを破った場合、洩れなく破門と神罰がついてくるとなると、さすがにみなさん、そう簡単には揺らいだりしないと思うよ」

「暗黒時代以降、神罰も厳しくなったという話だからな。神々の慈悲に甘え放題した挙げ句、世界の支柱たる方々を半減させてしまった性悪が相手だ。多少はきつい罰が必要だと、神々も

判断されたのだろうよ」

口々に説明された内容に、さすがのナルレイシアもそれ以上食い下がることを断念した。

破門と神罰――ひとつだけでも恐ろしいのに、ふたつともとなれば多少の誘惑などに靡くはずもない。死後の楽園を夢見るわけではないナルレイシアにしても、弔いもしてもらえず、黄泉路を導く光もなく、どことも知れない虚空の闇のなかを、永遠に彷徨うことを考えると鳥肌がたつ思いなのだから。

「そうか……って、あら？　じゃあ、スカルトードさんはいったいどこからその話を……」

聞き及んだのか、と問いかけるより先に、緑がかった金髪も麗しい青年は、にっこり笑ってはぐらかしてくれた。

「内緒です。あ、その方は誓いには縛られてらっしゃいませんから、破門も神罰も関係ありませんからね、念のため」

「はあ」

なんとなーく、それが誰かわかったような気がして、ナルレイシアは気の抜けた顔でうなずいた。

「ええっと……そういうことなら、神殿から情報が流れた線はなしとして……」

困った――これではふたりをその気にさせられない。

いかになんでも、この二人の協力なしには、リオを見つけることはできそうにない。なんとしてでも巻きこまなければ――必死に考えあぐねたナルレイシアの脳裏に、ぽん、とひとつの記憶が甦ったのは次の瞬間だった。

天啓――と、ひとによっては呼ぶかもしれない閃きだった。

「そうだわ！　ガスカール、あなたにちょっと尋ねたいことがあるんだけど」

彼の公爵という身分を考えれば、ナルレイシアの口調は砕けすぎたもので、本来なら言語道断ものだったが、なにしろ初対面が初対面、しかもそれ以来ずっと厭味の応酬を繰り返してきたものだから、いまさら直しようがない。

彼もそのことに関してとやかく言わなくなったものだから――最初のころは、それこそなにをしても、なにを言っても、文句と皮肉しか口にしなかったことを思えば、これは相当な進歩と言えるかもしれない――なんとなく落ち着いてしまったのだ。

ファティ・リンシャの言に拠れば、どこからか故郷におけるナルレイシアの評判を耳にし、鵜呑みにした挙げ句のあの態度だったらしい。馬鹿若の垂れ流した中傷被害だったというわけだ。

それを聞いたときには、腸が煮えくり返るかと思うほどの憤りを覚えたものだが、最近少しばかり態度が軟化しつつある――とは言ってもあくまで初めに比べれば、だが――彼を見てい

ると、ちょっと嬉しいかなとか思うのだ。

少なくとも、噂を鵜呑みにしたままではなく、ちゃんと見るところは見ていてくれたのだとわかって。多少なりとも誤解がとけたらしいことが嬉しいのか、彼が以前ほどトゲトゲ状態でなくなったことが嬉しいのか、頑固で融通の利かないなりに、彼が改めるべき点は改めることのできる『真性の馬鹿』でなかったことが嬉しいのか……そのあたりのことまではわからなかったけれど。

（無愛想なのは相変わらずなんだけどねー）

そんな彼女の思いを知ってか知らずか、ガスカールは本当に相変わらずの不機嫌な面持ちで問い返してきた。

「なにをだ？」

一部を除き――主に眉間だが――確実に表情筋が運動不足を起こしていること確実な顔を見ながら、内心のため息を隠すナルレイシアだった。

（スカルトードさんとは方向性違うものの、充分すぎるぐらいハンサムな顔なのに……このままだと老けるの絶対早いわ……もったいない）

宝の持ち腐れとはこのことだわ、などと埒もないことをぼんやり思っていたナルレイシアはどんどん険しくなっていく紫の瞳に気づくなり我に返った。

「あ、ええっと、ガスカール。あなた、斎王さまがたの周りに、きらきらしてるもの、見たことある？」

「……きらきら？」

思いきり不審そうに、ガスカールが眉宇をひそめた。

「なんだ、そのいかにも頭悪そうな表現は」

曖昧すぎる表現だった自覚はあったので、ナルレイシアはうっと詰まった。

しかし、では具体的に表現するとなると、これも難しく、彼女は眉間に縦皺を寄せて考えこんだ。

「金色の……って、一概にも言えないか。とにかく、砂金とか砂銀とか小粒の宝石とかが、光を反射してきらきら輝くみたいな感じの……光というか色というか……そういうのが、ときどきだけど斎王さまたちを包んでるように見えることがあるわけ。それであなたの目にはどう映ってるのかと思って」

なにしろ斎王院に入って以来、彼はナルレイシアに――たとえ多少の距離は設けようとも――つきっきり状態だったのだ。

斎王選出の基準や資質その他の詳細については、これまた極秘らしく、いくら尋ねても教えてもらえないこともあり、あれこれ考え辿り着いたほとんど最後の手がかりというのが、この

『きらきら現象』だったりする。

そのきらきらの強弱や光の種類が、神殿における選定基準のひとつなのでは、と思い当たった彼女は、だとしたら多少の差はあれど、同じ開祖フェルディーダスの血を引き継ぐガスカールにも認識できるのではないか、と考えたのだ。少なくとも五百年以上続いている、しかも公爵家の当主なら、一滴もその血を受け継いでいないはずがない。

だが、それでもこの問いを口にするには、決死の覚悟を要した。ナルレイシア自身、最初は目の錯覚か、あるいは質の悪い眼病にでもかかったのかと思ったほどだったのだ。しかも見えたり見えなかったり、眩しく感じるほどだったり、さほどでもなかったり。

悪化して視力が低下したら、大好きな読書に支障が出てしまう、どうしよう!?　と、一時期本気で悩んだものだ。

先日のお茶会で、アマンシールに「それは君が選定者に定められた時点で、神々から贈られたもうひとつの目のようなものだから、気に病む必要はないよ」と言ってもらえたことで、なんとか安心できたわけだが、頭がちがちのガスカールに告げるのは……やはり勇気が必要な行為だったのだ。

が、しかし。

渋面魔神の青年は、意外な反応を示したのである。

「色や光……か。因みにお前の目には誰がどんな風に映ってるわけだ？」

問いかけたのはこちらの方なのに、逆に問い返されてナルレイシアは困惑した。

これはどういうことなのだろう、と悩む。カマをかけられているのか、情報を引き出すつもりなのか、そもそも頭から信じておらず、聞くだけ聞いて鼻で笑うつもりなのか。

どれもあり得そうで、対応に苦慮した。

が、結局彼女が選んだ肢は、といえば――。

「そうね、ある方は淡い緑柱石のような輝きを纏ってらっしゃるときがあるわ。潑剌として心から楽しんでらっしゃる時が多いけれど。またある方は紫水晶のような透明感のある光を放ってらっしゃるかと思えば、杉石のようなちょっと不透明な色彩を纏われてらっしゃることもあるわ。別のかたは真珠みたいだけど、ときどき鋭い刃を思わせるような冷たい銀色の光を放ったりなさるし、またある方は陽光そのものが季節によって違うみたいに色々違う、でも陽光であることに違いはないって思わせるような光を纏ってらっしゃるわ」

いっさい嘘を交えず、ナルレイシアは告白した。

ただし個人特定のできない言い回しで、だ。

これなら守秘義務を破ったことにはならないし……恐らくはガスカールがしかけたであろう罠にもかからずにすむと思ったのだ。

ナルレイシアのなかの危険を知らせる信号は、先程から点滅しまくりだった。本能の警告に彼女は従ったというわけだ。

だが……そんな彼女の必死の努力は……報われることはなかった。

「なるほど」

よくわかった、と告げてきたガスカールに期待したのが、そもそもの間違いだったのか。

彼は平然と、こうつづけてくれたのだ。

「説明まで受けて申し訳ないが、わたしはそうした『きらきら』を、目にしたことは一度としてないな」

と――。

「それなら最初から勿体ぶらないでさっさといってよ――っっ！」

そうナルレイシアが絶叫したのは言うまでもない。

18

石畳に響く足音に気づいたとたん、少女は慌てて近くの横道に身をひそめた。
耳を澄まし、足音に集中する。
カツカツと響くそれに迷いはなく、なにかを探している様子でないことを確認してほっと息をつく。
そのまましゃがみこみ、目を閉じる。
(くたびれちゃった……)
もう、何日になるだろう——あのお屋敷を脱け出してから。
閉じ込められていることには、さすがに気づいていたから、追手がかかるだろうことは予想していた。
窓には格子、内側にはひとつしか鍵はついていないのに、なぜか外側にはふたつ鍵穴のある扉、どこに行くにも常に誰かがついてきて、しかも屋敷の外へは絶対出られない。門に近づく

ことさえ禁じられる日々が半年以上もつづいたら、気づかないほうがおかしい。

おまけに『実のご両親』とやらが姿を見せる気配すらないことを考えれば、どうやら自分が勾引かされたらしいこともわかった。その理由まではわからなかったけれど、なんとなく、夢で会う自分とそっくりな、でもずっと女の子らしいあの子が引っ越したことが関係しているような気がした。

あの子――ユウリのことを、初めて夢に見たのは四つか五つのころだったと思う。

夢なのに……しかも熱を出したのは自分ではないのに、まるで自分が高熱を出してしまったかのように苦しくなった。

次に見た夢では、あの子は寝台に半身を起こした格好で、消化のいい、けれど贅沢この上ないご飯を食べていた。自分が食べたこともない材料が使われていたのに、その味まで一緒に味わったような気がして、不思議な気分だった。

夢は毎日訪れるものではなく、また自分が見たいときに見れるという種類のものでもなかったけれど、しばらくする内に、あの子の名前がわかった。

ユーカリィヤ、というのだ。

ごく親しいひとたちだけが、彼女のことを『ユウリ』と呼んでいた。そのことを知った夢から醒めた朝、ひとりで何度もつぶやいた。

ユウリ、ユウリ、と——ただし、声には出さずにだ。

本当にその名を口にしていいものかどうか、彼女にはわからなかったのだ。

夢を共有したことで、自分の方こそ誰よりユウリに親しくなったような気にはなったものの……もしかしたら相手——ユウリにとっては盗み見兼盗み聞きされたように感じてしまうのではないかと思ったのだ。

幸いにも、その問題は早々に決着が着いたのだが。

幾分体調が戻ったらしいユウリが、広くて手入れの行き届いた庭を散策する様子を夢にみたときのこと。

少女はぽつりとつぶやいたのだ。

「わたしもリオって呼びたい……な」

と。

リオ——それは両親以外に呼ばせたことのない、少女の愛称だった。

正式な名はリオライーシャ——両親以外はリーシャと呼ぶ。

(いいよ、呼んで！　あなたになら、そう呼ばれてもちっとも構わない！)

声が直接伝わることなどないと知りつつ、強く心からそう願ったリオライーシャは、次に見た夢で、ユウリが大切そうに、両手で胸を押さえながら「リオ」とつぶやいたのを見、聞いた

瞬間、胸の奥の一部がかっと焼けつくような衝撃を覚えた。
特別な響きを持つ声だと思った。少なくとも、自分にとってはそうだった。
だから……ずっと声に出すのを躊躇っていた名前を、次の日、そっとつぶやいてみた。
「ユウリ」
と。
そうしたらその日の夜、夢のなかでユウリが嬉しそうに「呼んでくれた」とつぶやくのを見て、心底から安堵すると同時に嬉しくなった。
夢のなかでしか感じ合うこともできないけれど、夢のなかでさえ直接言葉を交わすこともできないけれど――それでも自分とユウリの間には、確かに絆があるのだと感じられて……否、信じられて。
閉じ込められて見張られる日々に我慢できたのも、ユウリの存在があればこそだった。
夢における情報交換で、なんとなくとはいえ事情はわかっていたし、だったら時期を待つのが賢い選択だと思った。逃げる意志を皆目見せないリオライーシャに対し、周囲は慣れつつあったのだから。
もう、逃げ出す心配はないと、皆が思いこむころを見計らい、脱出を試みるつもりだった。
自由になるために。そしてユウリに会うために。

けれど、あの日――。

突然、胸をしめつけられるような苦しみに襲われたあの日――。

リオライーシャは、ユーカリィヤの命が風前の灯火であることを、理屈でもなんでもなく直感で確信したのだ。

いても立ってもいられなかった。

どうやって、あの屋敷から飛び出せたのか……思い出せない。本当に無我夢中で……だが、その状況はいまも変わりはしないのだ。

(ユウリがいるのは斎王院ってところで……それは王宮のなかにあって……あそこに行かなきゃユウリには会えないんだ……)

けれど――。

心にのしかかる大きな不安。

(もしも……会えなかったら……?)

そうしたら、自分はどうすればいいのだろう。

飛び出した日から、ユウリの夢を見ていない。それはなぜなのか――考えるだけで胸がしめつけられる。

(助けて……誰か。ううん、だめ……自分でちゃんとがんばらなきゃ……)

一所懸命自分を励ましてきたけれど、ロスタロイドに辿り着いたころから、元気が出せなくなりつつあった。

（くたびれちゃった……し、怖い……）

王宮に行くのが――斎王院に、もし……もうユウリがいなかったらと思うと。

「怖い……よ……」

つぶやくリオの脳裏に浮かんだのは、屋敷を逃げ出して間もなく夢で見た、お姉さんの顔だった。

なぜかひどく驚いた顔をして自分を見つめた、蜜色の瞳がなぜか忘れられない。夢にすぎないとわかっていても……願わずにはいられなかった。

「ユウリみたいに、あのお姉さんも本当にいたらいいのに……な」

だって、あのお姉さんは黄神さまと同じ色の目をしていたから……。

しゃがみこんだまま、リオライーシャは固く目を閉じ、歯を食いしばった。そうしないと涙が溢れそうで……そして一度こぼしてしまったら、もう立ち上がることができなくなりそうな気がしたから。

「あら、おや、まあ」

現在二階を修築中の『踊る赤馬亭』の女主人は、三人を目にするなり意外そうに目を瞠り、こう洩らした。

三人とはもちろん、ナルレイシアとスカルトードとガスカールである。

「スカーはわかるとして……ここにいるはずのない方々の幻が見えるわ」

軽い口調で告げられた言葉に、ナルレイシアは思わず身を縮めた。

皮肉や厭味でないことはわかっていても、先日お世話になった挙げ句、かけてしまった迷惑を思うと笑ってかわせない。ナルレイシアを狙った——正確には、賊が彼女の荷物に紛れ込ませた指輪を取り戻すため、だが——爆発騒ぎのおかげで、踊る赤馬亭の外壁には焼け焦げが、二階の部屋には煤と煙による被害が残されたのだから。

二階部分が修築中なのはそのせいだ。

「あの節は、本当にご迷惑をおかけしました。なのにお礼もお詫びも満足にしないまま……」

本当に申し訳のないことを——と、つづけようとした彼女を、ランディータの笑いを含んだ声が遮った。

「いいっていいって。事情が事情だったわけだし、丁寧な詫び状送ってくれたじゃないか。そ

れにある程度の被害は最初から計算済みだったしね。そのへんのことはスカーと話もついてるし、あんたが気にすることないよ」

それはつまり、被害賠償はスカルトードが引き受けたということだろうか。

寝耳に水のことに、ナルレイシアは慌ててスカルトードを振り向いた。

「そんな……スカルトードさん！　わたしのせいなんですから、賠償はわたしが……えと、一括では無理ですけど、分割でなら……」

しかし、二階部分を修築するのにかかる費用はいかほどだろうかと思うと、この先最低五年……いや、十年は爪に火を灯す日がつづくかも、と思って一気に青ざめたナルレイシアであった。

「気になさらないでください、ヴィル・ダカール。元々わたしが持ちかけた話なのですし、ギスカリール師への紹介状を書いていただくことを考えれば、安いものです」

一部の人間の間で、どうやら有名らしい師匠に感謝するも、ナルレイシアとしては金銭感覚の違いに呆然としてしまう。

ナルレイシアだとて、ダカール商会社主の娘として生まれ育った身だから、飢えとは無縁な日々を送ってきており――不幸中の幸いの権化の異名通りの数奇な巡り合わせのせいで、食うや食わずの思いを味わわされたことはあったとはいえだ――ときには贅沢な金の使い方を目に

したこともあったわけだが……スカルトードの場合、常軌を逸しているように感じられてならないのだ。

（そりゃあ、今回の通いお忍びに引っ張りこむために、最後の一押しとして師匠への紹介状、ちらつかせたのは確かにわたしだったけど……）

しかし、これでは不公平にすぎる。

「でも……！」

と、言い募ろうとした彼女を抑えたのは、意外なことに、不本意ながら彼女たちの計画に巻きこまれた格好となったガスカールだった。

「こいつのいう通りだ。こいつがよく見極めもせずに手に入れた似非稀覯本に支払った代価の総額を考えれば、少なくとも偽書がないだけ、ギスカリール師への紹介状には価値がある」

聞いてナルレイシアは貧血を起こしかけた。

（超大金持ちなんて嫌いかも……）

思考は完璧に、本筋から逸れていた。

戻してくれたのは、面子中一番現実的な宿屋兼食堂――ただし現在、宿屋のほうは休業中――の女主人だった。

「どうでもいいけど、ファティ・リンシャの魔法屋敷じゃなくて、うちに来たってことは、ま

たなんか事情ありなわけかい？　それとも頭の固い頑固爺ぃどもに、やっぱり前例なし尽くしの選定者なんか認められーんとか言われて、お払い箱になったとか？」

「いっそ、そのほうが面倒がなくて、わたしとしては助かったんだがな」

ぼそりと遠慮なく本音を口にする黒髪の青年の足を、踵で踏みつけながら、ナルレイシアはこりこりとこめかみを指で掻いた。

「申し訳ないとは思ったんですけど……前者です。但し、今回は寝泊まりとかしないし、単に人探しの拠点にさせてもらえたらありがたいかなー、とか思ってたんですけど、修築中だなんて知らなかったものですから……」

段々声が小さくなっていく。

問題のリオ探索を、不承不承ながらガスカールに飲ませた時点で――洗面室と浴室と寝室以外張りつき状態にある彼の目を盗むのは、どう考えても不可能だったのだ――ナルレイシアが相談を持ちかけられる相手はスカルトードしかいなかった。

その際、だめ押しとばかりに紹介状の件を持ち出したら、後の運びの簡単だったこと！

「それなら、いい心当たりがあります」

満面の笑顔で彼は次々に計画を実行に移すための情報までも披露してくれた。

斎王院の片隅に、外に通じる隠し穴があることなど、きっと王宮警備に当たる者も、神殿関

係者さえも知らないに違いない。

情報源は相変わらずの『秘密』で押し切られたが、ここまでくると、もはや考えられる人物は限られてくる。

しかし、その恩恵で斎王院を抜け出してしまった身としては、貝のごとく口を閉じるしかあるまい。

その結果がこの顛末。

(こんな、厄介事二倍、ランディータさんにかける可能性大な話になるだなんて)

事前にわかっていたら、絶対必ず阻止したに違いないというのに――!

しかし、怠惰の罪と言うべきか、最早この流れを変えることはできそうにない。

通いお忍び行兼リオ探索の本拠地は、この『踊る赤馬亭』以外にはなくなってしまった。

(なんだか、誰かの掌の上で踊らされている気分……)

ものすごく不愉快に感じながら、そう思ったナルレイシアの直感は……きっと本人は望まなかったことだろうが、的を射ていた。

ナルレイシアは後に歯ぎしりをして悔しがることになる。

だが、それはあくまで後の話だ。

このときの彼女はただ、リオライーシャという、現実に存在するかもどうかわからない少女

の身を、心から案じていただけだったのだ――。

19

ロスタロイドの北区にある下町を、薄手の外套を身につけた二人組が歩いている。

ひとりは十五、六の少女で、しきりと周囲に目を配っている。

もうひとりは二十代半ばに見える黒髪の青年だ。洗練された身のこなしのせいで、明らかに周囲から浮き上がっている。なにより人目を引くのは、彼のこの上はないという仏頂面である……なぜ自分がこんなところに、という思いを隠そうともしていない。

「……臭い」

ぼそりと不機嫌につぶやいた青年――言うまでもないがガスカールである――に、隣を歩く少女が小声で尋ねる。

「なにか匂うの？」

そんな彼女に、ガスカールは馬鹿にしきった目を向けて答えた。

「言葉にもう少し気をつけたらどうだ？　わたしは臭いと言ったんだ。匂うとも香るとも言っ

ていない」

しかしナルレイシアも負けてはいなかった。

「あら、嗅覚は個人差が激しいじゃない。同じ香りでも、いい匂いだと思うひとと悪臭だって鼻摘むひとに分かれることだって珍しくはないでしょう？」

一理あると思ったのかどうかはさておき、黒髪の青年は一拍ほどの間を開けて、淡々とこうつづけた。

「因みにわたしがいま感じているのは、生ゴミと犬猫の糞尿とおぼしき臭いだが、これもひとによっては芳しく感じられるたぐいのものなのかな？」

皮肉の棘たっぷりの言葉に、ナルレイシアは「世の中、どんな嗜好のひとがいるかはわからないでしょ」と応じた。

とはいえ、その黄玉の瞳にちらりと失望の色が走ったのは隠せない。

ランディータの店を拠点に、リオを探し始めて三日目のこと。ロスタロイドが狭い街でないことを差し引いても、足を棒のようにして探し回っているというのに、これまでそれらしい情報がひとつも入ってこないという現実は、なかなかに重いものがある。

日帰りお忍びでは、オースリン家の領地や、リオとその養父母が住んでいたと思われる地方まで出かけることは無理だったから、そちらには別の人間を送り、ロスタロイドでの探索にか

かったわけではあったのだけれど。

「元の家を目指してるんじゃないのか？」

いまさらな問いかけに、ナルレイシアは小さくかぶりをふった。

「いくら嫌気がさしてるからって、自分でも信じてないこと口にして、虚しくならない？　そりゃあ、捕まって間もないころならその線の方が濃厚だったでしょうけど、一年以上も我慢して騙されたふりしてた子なのよ？　飛び出したのは衝動的な理由からでも、そんなことしたら真っ先に家のほうに見張りがつくぐらいわかるはずだわ。それに……いなくなった時期から考えて、ユーカリィヤさまが危篤状態に陥ったことを感じ取ってのことだと思うもの。十中八九ロスタロイドに来てるはずだわ。直接会うのは無理だとしても、ロスタロイドなら王宮の噂とかはひっきりなしに流れてくるし、風聞というものは、ひとを介すれば介するだけ正確さを失っていくものだから」

正確な情報が欲しければ、噂の発信源に近づくに限るのだ。

ガスカールが仕方なさそうに肩をすくめた。

「まんまと逃げられた方も、似たようなことを考えているようだがな」

それは、この三日ほどで、集めることのできた情報のひとつだった。

ナルレイシアたちとは別に、金褐色の髪と青い瞳を持つ十ぐらいの少女を探す一団が、しば

らく前からロスタロイド中を動き回っている、というものだ。
「だからこそ！　わたしたちが頑張らなくちゃって話でしょ!?　幸い向こうは後ろ暗いところがあるみたいだから、直接探索には関われなさそうなんだし」
直に捜せるこっちの方が、まだしも有利と言えないこともないわ！
と、熱く主張する彼女に、ガスカールは複雑な表情を浮かべた。
「一概にそうとも言い切れんと思うが……。少なくとも向こうが握っている情報は変化しないが、こちらはそうもいかないんだしな」
（本当に、何だってこのひとはこう、ひとの意欲を殺ぐようなことばっかり……！）
腹立たしくは思ったが、言葉の内容はもっともだったので、ナルレイシアは悔しい思いで唇を噛みしめた。
そう、今回リオを捜し出すために、ガスカールを引っ張りこんだのには、理由がふたつあったのだ。
ひとつはもちろん、護衛役ということでぴったり張りついて離れない彼に、間違っても邪魔だけはさせないためというものだ。けれど、実のところ、もうひとつ大きな理由があったりするのだ。
それはずばり、彼の第六感的嗅覚である。

ナルレイシアが斎王たちの周囲に、ときどき光や色の乱舞を見る……否、視るように、ディエーン開祖の血を引く彼は、次代となる素質を秘めた者に近づいたとき、常ではないものの、現実に香っているわけではない香り、もしくは匂いとでも呼ぶべきものを知覚することがあるというのである！

ナルレイシアが口にした『きらきら現象』を全否定し、彼女をがっくりさせた挙げ句に打ち明けてきた悪辣さには腹が立ったが、この事実を聞いたことで、彼女は自分の考えに確信を抱いた。

つまり、問題の黒幕にも、なんらかの特殊な感覚でもって、斎王もしくはそうなれる資質を持つ人間を判別できるのではないか――そうしてその結果、相手はユーカリィヤこそが次代の柱神に違いないと確信したのではないかということだ。

けれど、この意見を口にして以降のことは、彼女の脳裏に重くのしかかる記憶となった。

なのに、内容が衝撃的すぎて、思い出したくもないというのに、あっさりと記憶の引き出しは開かれてしまう。

（聞かなきゃよかった……）

心からそう思うのに、聞いてしまった事実を記憶から消すことができない。

（本当に、なんて厄介な……）

そばにいるガスカールに気づかれないよう、そっと息を洩らしながら、ロスタロイドに下りてくる直前の斎王院でのやりとりを思い出した。

いくら後悔してもし足りない、いまでも胸に走る痛みに顔を顰めてしまうほどの……。

悔いばかりが残る出来事を。

「だから、ガスカールみたいな特殊な感覚を備えてるひとがほかにいても、おかしくはないと思うのよ。というか、そうでなきゃ、ユーカリィヤさまに焦点を絞ってきた理由が考えられないし」

これって守秘義務に引っかかるかしら、と思いながらも、一歩踏み込み、ナルレイシアはガスカールとスカルトードに打ち明けた。

「ユーカリィヤさまがときどきすごい光を放たれるのは確かに本当なの。一番神々しいのは誰かって尋ねられたら、それはユーカリィヤさまですって答えるぐらい。でも、神々しい光を発しているからって、次代さまとは限らないんだってアマンシールさまが教えて下さったから、こうして打ち明けられるんだけどね」

それでね、と彼女はつづけた。

「やっぱり黒幕には、ガスカールみたいな第六感があると思うの。ただし、その人物はあまりその感覚が強くないか、斎王さま全員と頻繁に顔を合わせる機会に恵まれていないかのどちらかじゃないかと思うの。斎王さま方全員に、資質があるのは間違いないことなのだし……そうした発露の瞬間は、常に感じられるわけではないんですもの」

そう告げたナルレイシアに、スカルトードが「なるほど」と首肯した。

「偶然ユーカリィヤ嬢だけにその兆しを認めたのだとすれば、確信してしまっても無理はありませんからね。しかも、彼女が斎王に選ばれてほぼ時を置かずに動きだしたということは、選出前にそれを知った可能性が高い……とはいえ」

と、そこでスカルトードは難しい顔つきになった。

「それだけの材料では、人物を特定するのは難しいでしょうね。開祖の血を引く裕福で野心を抱いている人物など、ディエーンには……言ってはなんですが、掃いて捨てるほどいるわけですからね」

（やっぱりいっぱいいるんですか、虎視眈々と次の玉座狙ってるひと……）

思わずがっくりしたナルレイシアに、意外にもガスカールが新たな情報を提供してくれた。

「いや、かなり篩にかけられるはずだぞ。アマンシールさまから伺った話では、この手の感覚

は絶対次代にも次期国王にもなれない者にしか宿らないということだからな」

「ガスカール！」

なぜかスカルトードが顔色を変えて叫んだ。

焦ったような、相手を気づかうような色が、灰緑色の瞳の青年の顔にはあった。

だが、告げられた内容に気を取られていたナルレイシアはそのことに気づかなかった。

「次代さまにも次期国王にもなれない……？　でも、じゃあ……」

次期国王、あるいはその伴侶となるために、リオを攫い監禁したという、彼女の推理はまったくの的外れということになる。

最初から見当外れの方向に、頭を使っていたのかと、そしてそれをガスカールは笑いながら黙って見ていたのかと、彼女の怒りは瞬間沸騰した。

「知ってて……あなた、そのこと知ってて……！　ずっと黙って神妙そうな顔して聞いてて！　信じられない！　内心笑いながらひとが一所懸命考えたこと聞いてたわけね!?　なんって性格歪んでるのっっ!?」

思わずガスカールの襟首を摑み、ぐいぐい締めつけながら詰め寄ったのだが、悔しいことに充分すぎるほどに鍛えた青年にとっては、いかほどのことでもない程度の行為にすぎなかったらしい。

これまた味方してくれてもよさそうなスカルトードまで、背後からナルレイシアを止めにかかってくる始末――悔しさのあまり、彼女の顔は真っ赤になっていた。

（馬鹿にして、馬鹿にして、馬鹿にして！）

怒り心頭状態にあったナルレイシアの意識は、しかし次の瞬間、すうっと冷めた。

ガスカールがひどく……そう、自嘲的な笑みをたたえた顔で、言を継いだからだ。

「アマンシールさまから伺った話だと言ったろう？　少し落ち着け。あの方は……まあ、そこにいる本の虫にはかなり例外的に色々話してらっしゃるようだが、本来、そう多くを語られる方ではない。真理に通じた方々の共通した特性かもしれないが……あの方が真実を口にされる機会はまず滅多にない。わたしが伺ったのも、その数少ない機会にあってのことだ。その意味するところが……わからないか？」

それはつまり、いま彼が語った内容は、本来明かされるはずのない、秘中の秘だということだろうか？

そして、それを知るものはごくごく稀であると……そういうことなのだろうか。

だとしたら、問題の人物がそのことを知らずに野心を滾らせている可能性はある。あるいは知らぬからこそ逆に、そうした知覚を持ち得たことを天啓だと勘違いして動きだしてしまったということも。

嘘や言い逃れでないことだけは、なぜか痛いほどに感じられてしまったから、疑うことさえできないナルレイシアは、きつい目を正面に立つ青年に向けることしかできなかった。

尋ねたいことはいくつもあった。

なぜ資格のない者にのみ、そうした知覚が与えられるのか。なぜ柱神であるアマンシールはその事実を公表しないのか。

なぜ、なぜ、なぜ、なぜ――脳裏を埋めつくすのは疑問符の嵐だ。

けれど一番わからない、一番解きたい謎は――。

「なぜ、アマンシールさまはあなたにそのことを教えたの？」

どきどき、どきどき、胸の鼓動が激しくなり、苦しいほどだった。

対するガスカールは落ち着いたものだった。

彼は、答えたのだ――あっさりと。

「エルスカーネ公爵家には五代前、前王家であるエルフィースの王女が嫁いで子を生している――庶出の流れを除き、エルフィース……前王家の流れを汲む家は我が家のみで、そのためにさまざまな問題が生じたという話だが……」

昔の話だ、とガスカールは言った――突き放すかのように。

決して忘れられない話だと思った。

けれど、同時に――。

忘れなければならない話だとも思った。

少なくともそのふりはしなければならないと、ナルレイシアは思い……そうして、そうすることを心に決めたのである。

20

そろそろ朝夕の冷え込みが厳しくなりつつある季節――窓ガラスごしの朝の陽光を浴びながら、ナルレイシアは欠伸をかみ殺した。

（ね、眠い……）

まったくもって情けないことに、彼女は現在睡魔との深刻な戦闘状態にあった。

原因はずばり睡眠不足で、自業自得だからここは戦って勝つしかない。

（それらしい子供見かけたって話聞いたはいいけど……まさか夜通し駆け回ることになるとは思わなかった……）

リオを狙う者がいる以上、一刻も早く保護したいと思ったのだが、少々先走りすぎた。

しかも結局のところ成果なしに終わったことを考えれば、無駄に疲れた分損した気分だ。

（でも、目撃証言に間違いはなさそうだし、ランディータさんも調べてくれるはずだから、そう悲観したものじゃないわよね）

自分を鼓舞しながら、彼女は開いたままの書物に目を落とす。

生来の本好きであるナルレイシアは、活字を前にすれば、多少の睡魔など吹き飛ばす特技の持ち主なのだが、人間やはり好き嫌いはあり、さらに適性というものが存在する。

現在彼女が開いている書物は、彼女がかなり不得意としているジャンルに関するものだったため、残念ながら睡魔退散の特効薬にはなり得ない。

（み、見てるだけで、頭が沸きそう……。数式なんて嫌いよ。加減乗除できたら普通に暮らす分には不自由ないじゃない）

不得意分野に対して、大抵の人間が口にする負け惜しみを、胸中でつぶやきながら、新たな欠伸を無理やりかみ殺す。

そんな彼女の様子に、くすくすと笑うのは、正面に座っていたササンシールである。

なにやら嬉しそうなのは……あながちナルレイシアの気のせいではないだろう。

「ヴィル・ダカールにも苦手なものがあったんだ」

ここ最近、午前中に限定して取るようになった『斎王さまとの対話の時間』だが、ササンシールは質問責めにすることで、ナルレイシアに挑戦をつづけているのだ。

そもそものきっかけは、彼女がぽろりと披露した歴史の知識だった。最初は素直に感心してくれていた彼だったのだが、元々負けん気が強い性格だったらしく、次から次へと難しい質問

を持ち込むようになったのだ。
どうあってもヴィル・ダカールに「参った、わかりません」と言わせて見せる――と、意気込んだ彼の挑戦は、どうやら今日報われることになりそうだった。
さすがに十一歳の少年に、先程思ったことを口にする気にもなれず、ナルレイシアは鼻頭をぽりぽりと指で掻いた。
「別に……専門知識が必要な職につくつもりはないからいいのよ」
この台詞に、ササンシールが悪戯っぽく笑った。
「ぼくのこと、負けず嫌いとか言っておいて、ヴィル・ダカールも相当なものじゃありませんか」
初めての勝利がよほど嬉しいのか、ササンシール少年の頬はバラ色に輝いていた。
小憎らしいと思わないでもなかったが、整った顔だちの上、得意気な表情の少年には、年相応な幼さが見て取れて、逆に微笑ましささえ覚えてしまう。
（差別する気はないけど、外見がいいのはやっぱり得よね）
などと思っていたナルレイシアは、しかし次の瞬間眠気も裸足で逃げ出す衝撃に襲われた。
「ところで、ヴィル・ダカール。下町で捜し物は見つかったんですか？」
「な……」

慌てて「なんのこと？」と白を切ったものの、上擦った声が完全に言葉を裏切っていた。

本日二度目の勝利に、ササンシールの笑みがますます大きくなった。

「惚けることないでしょうに……っていうか、意味ありませんし。うちの家族ですら摑んでるんですからね、もうどこの家も知ってると思いますよ。内緒で動き回るには、エルスカーネ公爵は目立ちすぎますから。まあ、夜遊び三昧の悪行をネタに、うまく操ってやろうだなんて頭の悪そうなことを考えてるひとたちもいるみたいですけど」

声が妙に皮肉げなのは、その頭の悪そうなことを企んでるのが、彼の実の家族だからかもしれない。

しかし、ナルレイシアはそれどころではなかった。リオ捜索はあくまで秘密裡に行わなければならないことだというのに、これでは台無しではないか。

（抜かったわ！　そりゃあ、背ぇ高いし、顔そこそこ以上にいいし、すらりとしてるし動きもさっそうとしてるから、一緒に歩いてるだけでなんだか振り返るひと多いなー、とかは思ってたけど！　でも顔が見えないように頭巾つきの外套着てるから、スカルトードさんと一緒に歩くよりは目立たないと思ったのにぃっっ！）

両者を知る者なら即座に「それは五十歩百歩というんです」と断じたに違いない。

ナルレイシアはきちんと正常な美意識の持ち主ではあったが、そうした方面に対し、極端に

高い順応性を誇る人物だった。綺麗、格好いい、美しい、可愛い……などなど、感じはしても早々に、記憶というか情報というか、まあそういう分野の引き出しに、振り分けてしまうのである。

そうして情報として一度片づけてしまった事象については、これも学習能力と呼んでいいものかどうかは不明だが、認識済みのこととして、かなり冷静に対処できてしまうのだ。

彼女は知らないことだが、神のごとき美貌の主であるスカルトードと、初対面時はともかく、二度目ですっかり普通に会話できるようになったという事実は、彼の周囲を大いに驚かせたものだ。知り合って何年経とうと、会うたびにぼうっと見とれてろくに口もきけないご婦人が数えきれない状況なのだから。

そんな、少々特殊な認識能力の持ち主であったものだから、ナルレイシアは大まじめにササンシールに問いかけた——傍から聞けば、なんの冗談かと思うようなことを。

「……ね、有名って、あのひとそんなに遊び人なの？」

仮にも——ずいぶん失礼な言い種だが——前王家の血を引く公爵なのだから、有名なのは当然としても、王族の方々のように、絵姿が市井に出回っているわけではなかろう。

だとしたら、彼自身が頻繁に下町に顔を出し、そのせいで有名になったのではないか……と思ったわけだが、この問いに対し、ササンシールは酢でも飲んだような顔になって問い返して

きた。

「……ヴィル・ダカール。公爵のどこをどう見たら、そんなとんでもない考えが出てくるんです？」

「え？　あぁ、その……いくら有名でも、顔が知られているかどうかはまた別の問題でしょう……？　王族の方々みたいに絵姿が出回っているというなら話は別でしょうけど。そうでないのに、誰もがすぐに彼のことに気づくということは、頻繁に街を出歩いているからかな、と思って……」

「ヴィル・ダカール……絵姿などなくても、彼が何者なのかは顔を見れば一目瞭然ですよ。正確にはあの瞳を、ですね」

呆れたようなササンシールの声と口調に、ますます首をかしげたナルレイシアだった。

「瞳……？　確かに紫だなんて、珍しいとは思うけど……」

ひとにあり得ない色彩というわけではない。

そう言うと、ササンシールは困った顔でかぶりをふった。

なにやら思案顔で、少しの間黙りこんでいたが、思い切ったようにナルレイシアを見つめてきた。

「ヴィル・ダカール、失礼ですが、公爵がエルフィースの血を引いてらっしゃることはご存じ

ですか？」

「一応……」

ただ、そのときの彼の昏い瞳ゆえに、突っ込んだ事情を聞くことはできなかったが。

「では、エルフィースの直系の血を引くいまでは唯一の人物が公爵だということは？」

「それも一応……」

聞きはしたが、それがどんな意味を持つのかまではわからない。

そもそも長い歴史のなか、政略結婚を繰り返してきたこの国の貴族は、そのほとんどが血縁関係にあるといっても過言ではないらしいのだから。

「そのご様子だと、紫の瞳がエルフィース家直系にのみ受け継がれる特徴だということはご存じないようですね。もちろん、公爵が直系のはずはありません。ですが紫の瞳を持って生まれてきたことで、周囲は彼をエルフィースの末裔と見なしたそうです。これが、どんなに危険なことかおわかりですか？」

エルフィースの王女がエルスカーネ家に嫁いだのが五代前という話だから、隔世遺伝ではない……一種の先祖返りだろう。

「でも、貴族のほとんどが開祖さまの血を引いてるんだから、たまたま先祖返りが生まれてもおかしくはないと思うのだけれど……？　王家が交代して間もないころなら騒ぎになったかも

しれないけれど、もう二百年近く経っているのだし……」

それほど気にすることはないと思うのだけれど――。

そうつづけたナルレイシアに、ササンシールは厳しい顔つきで「いいえ」と答えた。

「二百年経ったいまだからこそ、です。王家の交代といえば聞こえはいいですが、実のところそれは内乱にすぎません。雌雄が決した後も、血なまぐさい騒ぎは後を絶たなかったそうです。実際、エルフィースの前の王家であるマルコリーズ家の直系に連なる者はひとりとして残ってはおられません。エルフィース王朝時代には、マルコリーズの名を口にするのも禁忌とされたほどなんです。五代前の公爵は、当時はやはり公爵だったファラスースの当主の親友にして片腕として、獅子奮迅の働きを見せたという話です。そのことがあって、その奥方は離縁されることも幽閉されることもなく天寿を全うできたそうです。もちろん、おふたりの間に生まれた子供もです。もっとも、そのころ、公爵のような子供が生まれていたら、保証の限りではなかったでしょうがね」

想像以上に重い話に、ナルレイシアは全身が緊張するのを感じた。

王家の交代という名の内乱――それは敗れたほうの身内のほとんどを全滅させるほどに熾烈なものなのだ。そしてそれが起こるのは……。

あることに気づき、ナルレイシアははっと息を呑んだ。

（王家の交代劇は、約二世紀に一度、新たな柱神さまの誕生とともに始まる……）

そして、ファラスースが王権を握ってそろそろ二世紀――そんな時期に、前王家の直系そのものの瞳を持つ子供が生まれたとしたら……？

当人の意志に関わりなく、さまざまな思惑が周囲で錯綜したのではないだろうか。

彼をエルフィース復活の鍵と見なし、勝手に期待を寄せる者、利用価値ありと良からぬ下心つきで近づいてくる者、逆に危険因子として排除しにかかる者――ドロドロである。

（っていうか、いまのわたしも似たようなもんか……。せっせと賄賂届けられたり、断ったら今度は脅し文句届けられる羽目になったり……いまのところ実力行使にまでは至ってないけど……あ？　もしかして……？）

ふっと気づくことがあり、ナルレイシアは真剣な目でササンシールを見つめた。

「……だから、ガ……エルスカーネ公爵がわたしのそばについてくれたことを喜んで下さった……？」

不穏な輩に脅かされた過去を持つガスカールなら、彼らのやり方に通暁していると、それがわかっていたから。

ササンシールは悪戯がばれた子供のように――実際彼は子供なのだけれど――小さく舌を出して笑った。

「ヴィル・ダカールがもっと年配の、世馴れたひとだったら心配なんてしませんでしたけど……あなたには危険な目にはあってほしくなかったし。ぼくでは悔しいけど、守ってさしあげるどころか逆に危険な目にあわせるだけだと思ったし……」

本当、悔しいなあ——と、自分の手を見下ろしながらつぶやく少年の本音には気づかないまま、ナルレイシアは笑顔で礼を口にした。

「心配してくれて、ありがとうございます」

同時に、他にもお礼を言わなければならない人物がふたりほどいたことに思い当たる。

（そう言えば、ユーカリィヤさまもガスカールがついてるって知ったとたん、安心なさったご様子だったし、セリアラさまも、なにかというと小言魔神になる彼のこと苦手で嫌いと仰りながら、でも絶対彼の目を盗んでどうこうしようとはなさらないのよね。意外と言えば意外だけど、あのひとって実は結構信頼されてるってことなのかしらん？）

などと思いながら、「少しは見直してやってもいいかなぁ」と声なくつぶやいたときのこと、ササンシールが実にさりげなーく、質問攻撃に戻ってきた。

「それで、成果のほどは？」

思わず「それがなかなか」と答えかけたナルレイシアは、危ういところで気がつき、両手で口を押さえた。

愛すべき子供であるササンシールはしかし、同時に油断禁物の危険人物でもあった。

（あ……っぶなかったー）

内心冷や汗たらたらの気分で、彼女はじろりと少年を睨めつけた。

「……ササンさま」

少年はくすくす笑いながら肩をすくめた。

「残念。なにか手伝えるようなことがあるなら、いい点数稼ぎになるから、うまく聞き出そうと思ってたのに」

下心ありありだと告白したも同然の少年の態度はあっけらかんとしており、嫌悪や警戒心を抱かせない不思議な魅力に溢れたものだった。

だから、つい苦笑で応じてしまう。

「……ササンさま。質のよろしくない悪戯を企んでる子供の顔になってらっしゃいますよ？いくらわたしの弱みを握ったところで、選定結果には反映しないことはわかっておいでのはずでしょう？」

最初から『次代さま』になるつもりはないと明言しているこの少年の言葉を、鵜呑みにするのが危険であることに、ナルレイシアは薄々勘づいていた。

次代の柱神になることに執着がないことは確かかもしれないが、それ以外の部分は大いに怪

しかったりするのだ。

とはいえ、どのあたりにどう怪しいかまではわからないのだが。

果たしてと言うべきか、ササンシールのにっこり笑顔つきの返答は、ナルレイシアには解読不能の難問だった。

「もちろんですとも。でも、そういう言葉が出てくるってことは、ぼくのこと完全に信じて貰えてないってことで……それについてはちょっとへこんじゃうかなあ？　あ、だけど、目的がなんであれ、ヴィル・ダカールも公爵も、ふたりとも目立つことにかけてはどっこいどっこいなんですから、もう少し自重するというか、目立たない努力をするとか……」

と、そこまで言いかけて彼はがっくりと肩を落とした。

「……いえ。詮ないことを言いました。どうか忘れてください」

と――。

言う方が納得していたとしても、言われる側もそうとは限らない。

いったいどういうことなのかと、ナルレイシアが詰め寄る寸前に『斎王と選定者の対話の時間』の終わりを告げる鐘が鳴った。

正午を知らせるものだった。

（うーん、いまいちしっくり来ないのよね……）

と思った彼女の心を読み取ったかのごとく、別れ際、ササンシールが耳元にささやきを残して行った。

「くれぐれもご用心を」

もちろんとばかりに大きくうなずいたナルレイシアは、しかし後に「だから言ったのに！」との彼の非難を突っぱねられない立場に追いやられることになった。

珍しく、ガスカールの姿が見えないことに、どうしたことかと首をかしげた朝のこと。

エルスカーネ公爵さまからの手紙でございますと手渡された封筒には、しっかりと公爵家の紋章の蠟封がなされており、だから誰も不審には思わなかった。

内容も、自然なもので、ナルレイシアを含め、その周囲で、その手紙に対して警戒心を抱いた者は皆無であった。

手紙には、こう認められていた。

「さる方と話し合う必要が生じた。長くはかからぬとは思うが、待ち合わせを二刻ほどずらしていただきたい」

と。

さる方とは多分当代柱神であるアマンシールのことだろうと見当をつけたナルレイシアは、この手紙を信用し、指定通りの時刻に指定の場所に赴き、それがとんでもない勘違いだった事実を噛みしめる羽目ととなったのだ。

極秘の抜け道を通って王宮を抜け出したとたんのことだった。

「ナルレイシア・フォイリリル・ダカール？」

背筋が寒くなるような、事務的な問いかけが耳に飛び込んできたのは。

目をあげるまでもなく、周囲を囲まれていることはわかった。

「君に危害を加えるつもりはない」

とも、告げられた。

信憑性は高い言葉だと感じられた。

その言葉に従えば、危険を回避して安全な日を手に入れられるかもしれないとも……わかっていた。

それでも。

それでもだ。

ナルレイシアはどうしても、彼らの言い分を信用する気にはなれなかった。

（またしてもジンクス全開っていうか、どちらかといえばジンクス崩壊……？　これまでだったら不幸中にも幸いなところって見いだせたんだけど、今回ばかりは見当たらないんだものなあ……）

そこで諦めてしまうか否かが、人生における大きな分岐点なのかもしれない。

ナルレイシアは……。

少なくとも、諦めてはいなかった。

あとがき

嘆(なげ)きの『低鱈苦(ていたらく)』その二、行きます。

どこぞの某作家は、どこまでも自作の枚数を読めないことを、今回またしても暴露(ばくろ)してしまいました。

今回こそは完結！　を目指して話を展開したはずだったというのに……全然、終わってませんし。

さんざん完結目指してこねくりまわしたあの日々はなんだったの!?

などなど。

思うところは多々ありますし、終われなかった慙愧(ざんき)の念はありますが、今回の原稿は全力投

球の結果ですので、くよくよ考えこまないことにします。

ああ、でも今回も、終わってないから裏事情ネタとか暴露できないのが辛いー。

でもでもさすがに次では終わります。とゆーか、絶対終わらせます。

今回少々重い要素が加わっちゃいましたが、あくまでこの話の基本は「明るく元気！」なので、それを守っていきたいです。

しかし今回手こずらされた一番の厄介事は花粉症でありました。数年前から症状が出るようになってたんですが、去年まではそこまで深刻ではなかったんです。だから甘く見てたら……今年ときたら、もう！　ティッシュ消費量倍増した上、頭はぼーっとするし、鼻のかみすぎでトナカイ状態になっちゃうし……この原稿終わったら、真面目に病院通います。

少し前になりますが、パソコンを変えました。

ワープロくんから切り換えて、ずっとノートでやってたんですが、あれだとどうしても前屈み状態になって、首と肩が辛いんですね。調子も悪かったので、思い切ってデスクトップに。画面を見下ろさずに原稿が書けるのは、本当に楽だと痛感しております。しかし、最近のパソコンは本当に多機能で、そのほとんどを使いこなせずにいる身としては、なにやらパソに申し訳ないような気がしております。

「再生はもちろん、ＤＶＤ－Ｒ、ＲＷ共に書き込みできますよ。オプションをつければさらに

……」

などなどと、いかに高多機能かを説明していただきながら、話の半分も理解できず、しかも本体にフロッピーディスクドライブがついてないことに衝撃を受け、

「あのー、オプションならフロッピーのほうを……」

とお願いしてしまった（時代からの）取り残され者……。

その話を聞いた友人曰く「オプションですらなくなる前に、ちゃんとCDなりDVDなり、書き込み方覚えなさいよ」……ごもっともです。でも、文字情報ってデータとしては小さいから、なんかCDやDVDに対して申し訳ないような気も……ひとはこれを貧乏性と呼ぶのでしょうか。

でも、書き込みはともかく、再生するだけなら簡単なので、DVD鑑賞には活躍してもらっております。初期のPS2の命が風前の灯火状態である現在（おまけにビデオも先日ついにテープを咀嚼するという事態に……うぅぅ、おかげでビデオレンタルできない）、レンタル映像を楽しめるのはパソのおかげです。残る問題はテレビ録画ですが……うーむ、どうしよう。なにしろ今年は四年に一度のオリンピックイヤーだし、シドニーと違ってアテネじゃ時差考えるとライブで見続けるのは無理があるし……と、かなり他愛のないことであれこれ悩んでます。

昨年祭り前夜（文字通りの前日の夜）の街を訪れる機会があったのですが、そのときしみじみ思ったことがあります。

「お祭りって、いいなぁ」

ということです。

もちろん賑(にぎ)やかで楽しいということもありましたが、祭りを作り上げる街のひとたちの楽しげで誇らしげな様子を見ていると、正直羨(うらや)ましくなりました。わたしの生まれ育った地方にはそうした住民一同一丸(いちがん)になって「やるぞ！　燃えるぞ！　盛り上がるぞ！」みたいな祭りがなかったもので、祭りの時期が近づくと「血が騒ぐ」と口にしていた友人の言葉に、いいなあ、と思う反面、でもなぜそこまで？　とか考えてたんですが……前夜の空気に実際に触れたとき、なんだかわかったような気がしました。

空気が、本当に違ってて、緊張感と期待感と……あとは、もうやる気。そうした感情や気概が空気中に溶け込んでるような、そんな感じを受けました。

一言に集約するなら熱気としか呼びようのないものですが、「ああ、こんな空気を生まれてずっと吸いこんでたら、条件反射で血も騒ぐようになるなぁ」と思ったものです。残念ながら祭り当日には参加できなかったのですが（飛行機のチケットが、その日の分しか取れなかった

のです）是非、今度は祭りそのものの熱狂状態に身を浸してみたいものだと思いました。

人の努力と心というものは、空気すら染め上げて、さらには別の人間にまで伝えてしまう、それぐらい大きく強い力を持っているのだと、わかっていたつもりのことなのに再認識させられました。

この原稿が終わったら、どこかの祭りに出かけようと算段中です。今からではホテル取れそうにないから日帰り可能距離圏内になりそうですが……あるかな？　つくづく、自分の計画性のなさに呆れております。計画性って、やっぱり大事ですね。

そろそろ結びとまいりましょう。

担当の永田さま。またしてもぎりぎりまで締め切りを引きずることになり、本当に申し訳ありませんでした。『低鱈苦』（念のためですが、正しい「ていたらく」は体たらく、もしくは為体と書きます）第三弾だけは、なんとしても回避する所存ですので、どうぞよろしくお願いします。

明咲トウルさま。前回に引き続き、極悪なスケジュールをお願いすることになってしまい、本当にお詫びの言葉もありません。

可愛くて行動力たっぷりそうなナルレイシアや、男前のガスカール、綺麗だけど裏を覗くとなんだか怖そうなスカルトード、上品そのものだけどもしかしたら裏があるのではと思わせる

ファティ・リンシャ――明咲さんのイラストのおかげで、イメージがより喚起されました。次巻もどうか、よろしくお願いします。

最後に、読んでくださる方々。

完結することを信じて手に取ってくださった方々、本当に申し訳ありません。次がなにになるかは目下検討中です。よろしければリクエストして下さい。では。

平成十六年　四月　某日

前田　珠子

この作品のご感想をお寄せ下さい。

前田珠子先生へのお手紙のあて先

〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10
集英社コバルト編集部　気付
前田珠子先生

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、最近では実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



天を支える者2

COBALT-SERIES

2004年5月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　谷山尚義
発行所　株式会社 集英社

〒101－8050
東京都千代田区一ツ橋2－5－10
(3230) 6268 (編集)
電話　東京 (3230) 6393 (販売)
(3230) 6080 (制作)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2004　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社制作部宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN4-08-600413-5 C0193

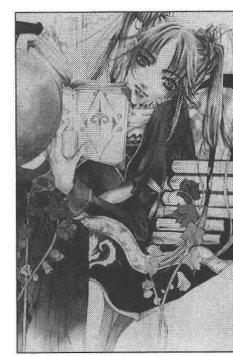
〈好評発売中〉 コバルト文庫

不幸の中にも必ず幸せはある!?
本好き少女の痛快ファンタジー!

天を支える者

前田珠子

イラスト／明咲トウル



行儀見習いの少女ナルレイシアは無類の本好き。書物目当てに屋敷で働いていたが運悪くトラブルに巻き込まれクビに。だが幸いなことに別の屋敷から依頼があり王都に向かうが!?

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし少女よ、魔性に立ち向かえ！

前田珠子 〈破妖の剣〉シリーズ

イラスト／廈門 潤



漆黒の魔性
白焔の罠
柘榴の影
紫紺の糸（前編）（後編）
翡翠の夢1～5
鬱金の暁闇1～3
女妖の街 破妖の剣 外伝①
ささやきの行方 破妖の剣 外伝②
忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③
時の螺旋 破妖の剣 外伝④
魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤
呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥

コミック版 好評発売中

破妖刀・紅蓮姫を操る剣士ラスの
愛と闘い…大人気ファンタジー！

前田珠子/厦門 潤

破妖の剣
廃性降臨
白い焔に包まれて消えた街——その原因を探るラスと少年ザハトだったが!?



破妖の剣
紅の魔剣 碧の魔胎
最愛の使い手を失い暴走する紅蓮姫…。ラスと出逢う前の紅蓮姫の哀しい物語。



破妖の剣
深紫絃韻 1 2
魅縛師リーヴィの里帰りに同行したラスは、思いがけないピンチにおちいるが…!?



〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。

前田珠子

〈聖石の使徒〉シリーズ

イラスト／山本鳥尾

聖石の使徒

其は焔をまとう者

聖石の使徒

其は力を放つ者

聖石の使徒

其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒

其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ



〈好評発売中〉 コバルト文庫

とびきり有能な人材、提供しまーす。

イズァーカ商会へようこそ

前田珠子
イラスト／鈴木理華



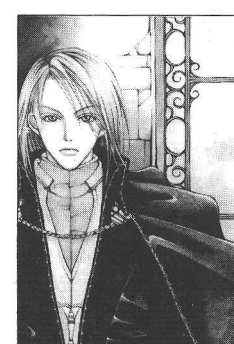
イズァーカ商会はどんな厄介事も引き受ける、世界最大にして唯一の人材派遣会社。特殊護衛課のカリンたちのもとには今日も物騒な依頼が舞い込んできて!?トラブルコメディ！

〈好評発売中〉 コバルト文庫

約束の庭でほほえむ、美しい妖魔。
華麗なる王国の幻想ファンタジー！

タラスタロスの庭

前田珠子
イラスト／木々



狂王カァスタイーンは残虐な殺戮の末、遂に広大な国タラスタロスを平定した。だがその裏には、選ばれし者にしか見えない、空中に浮遊する庭で会った妖魔との約束があった…。

〈好評発売中〉 コバルト文庫

新宿に吸血鬼出現？私が巫女体質？
ファンタジック学園コメディ！

女神さまのお気の向くまま1〜3

前田珠子
イラスト／辻 よしみ



異界から侵入してくる怪物から「こちら側」の世界を守っているふたりの女神さま。そのひとり・嫦娥の依巫となってしまった高校生・桜子は超多忙、大迷惑な毎日を過ごしていて!?

〈好評発売中〉 コバルト文庫

美しく切ない叙情ファンタジー

前田珠子 〈月下廃園〉シリーズ

イラスト／江ノ本瞳

月下廃園

月華の国の王子で、風の愛し児トゥミャーンは、王宮の庭園で出会った美しい人物が忘れられず…。

月下廃園2

ある想いから、自らを月華の王宮の庭園に呪縛しているセジュン。そんな彼を慕うトゥミャーンだが。

月下廃園3

トゥミャーンは光明神殿の使者として、セジュンが消えた月華に3年ぶりに戻ったが!?



〈好評発売中〉 コバルト文庫

目覚めよ、永遠楽土を守る聖獣たち！

前田珠子

〈聖獣〉シリーズ

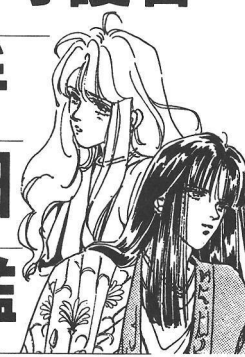
イラスト／おおや和美

まどろみの守護者

聖獣復活譚 前

銀の守り手

聖獣復活譚 後



目覚める日

聖獣覚醒秘譚　第一部

深き闇の檻

聖獣覚醒秘譚　第二部

昏き夜の果て(上)(中)

聖獣覚醒秘譚　第三部

〈好評発売中〉 コバルト文庫

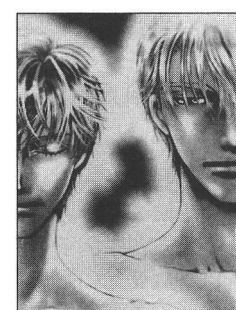
超人気シリーズ、完結編！

炎の蜃気楼(ミラージュ)㊵

千億の夜をこえて

桑原水菜

イラスト／浜田翔子



天御柱の中で信長の思念を捜す高耶と直江。その間にも信長の力は全国に被害を拡大させる。すべてを巻き込む＜闇戦国＞の結末は!?

〈炎の蜃気楼(ミラージュ)〉シリーズ・好評既刊

耀変黙示録 Ⅰ～Ⅶ
革命の鐘は鳴る
阿修羅の前髪
神鳴りの戦場

既刊39冊好評発売中

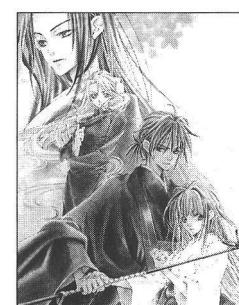
〈好評発売中〉 コバルト文庫

その愛を許してはいけない——。

姫神さまに願いを

～雪去りの紅～

藤原眞莉
イラスト／鳴海ゆき



岐阜城の様子を伺うテンとカイのもとに織田信長の妹・市姫が現れた。一方、生駒御前を蘇らせた信長の陰にはルイスの存在が…!?

〈姫神さまに願いを〉シリーズ・好評既刊

姫神さまに願いを
～享楽の宴～
～浪の下の都～
～永遠国ゆく日～
～鏡語りの森～
～夢路の剣～
～巡恋夏城～
～血誓の毒～
～月の碧き燿夜～ 前・後編
～秘恋夏峡～
～殉血の枷～
～遠国散る恋華～ 前・後編
～荊いだく蝶～
～空参鳥の幻～
～空葬の瞳～

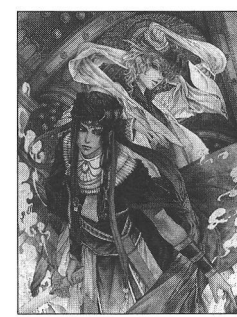
〈好評発売中〉 コバルト文庫

砂漠をさすらう、愛と祈り。

砂漠の花Ⅳ

流砂放浪

金蓮花
イラスト／珠黎皐夕



砂漠に逃がした初恋の相手シリス公子を、自ら連れ戻すことになったカリュン。苦しむ彼女にレンソールは思わず想いを打ち明ける…。

〈砂漠の花〉シリーズ・好評既刊

砂漠の花
砂漠の花 Ⅱ 青海流砂
砂漠の花 Ⅲ 夢幻泡影

〈好評発売中〉 コバルト文庫

占いが王国の新たな未来を開く。

緑のアルダ

旅立ちの丘

榎木洋子
イラスト／唯月　一



守龍を連れて来るのは
アナンシア姫――？
王宮に動揺が走る中、
黒い罠が姫を狙う。一
方、アルダ・ココは占
いにすべてを託すが!?

緑のアルダ シリーズ・好評既刊

石占の娘
荒れ野の星
千年の隠者
謀略の都
虹の白夜

〈好評発売中〉 コバルト文庫

"時の亡者"追跡作戦開始!

東京★千夜一夜

紫の魔術師と三つの石

小沼まり子
イラスト／うたの



魔術師の力に目覚めた女子高生・和花。自分を呼ぶ謎の声を聞き、時の〈トビラ〉を開いてしまうが、もとの世界に戻れなくなって!?

〈東京★千夜一夜〉シリーズ・好評既刊

東京★千夜一夜
恋する魔術師

〈好評発売中〉 コバルト文庫

《獣》の魔手がついに貴族を捕える!?

シャリアンの魔炎3

ゆうきりん
イラスト／高屋未央



炎上する修行院に駆けつけた《神聖青薔薇騎士団》を率いるリリーティグ。だが《獣》のルァズに仲間を殺され一人になった彼女は!?

〈シャリアンの魔炎〉シリーズ・好評既刊

シャリアンの魔炎
シャリアンの魔炎2

〈好評発売中〉 コバルト文庫

若き王を救うのは女子高生!?
波乱だらけのお宝探し!

月のパンドラ

天河りら
イラスト／純　珪一（すみ　けいいち）



月王・シャルルを救うため、中世のフランス王朝に召喚された女子高生・璃羽（りう）。行方不明の王の宝〝パンドラ〟を探しに美形騎士クウガと一緒にきた城には幽霊騎士の噂があり!?

コバルト文庫 雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」

募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の新しい書き手の方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人賞の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、自分の才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!

〈大賞入選作〉
正賞の楯と副賞100万円(税込)

〈佳作入選作〉
正賞の楯と副賞50万円(税込)

ノベル大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙95～105枚。
【締切】 毎年7月10日(当日消印有効)
【応募資格】 男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt12月号誌上(および12月刊の文庫のチラシ誌上)。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10(株)集英社
コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる「ノベル大賞・読者大賞」(大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円)の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙250～350枚。
【締切】 毎年1月10日(当日消印有効)
【応募資格】 男女・年齢・プロ・アマを問いません。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt8月号誌上(および8月刊の文庫のチラシ誌上)。大賞入選作はコバルト文庫で出版(その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします)。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10(株)集英社
コバルト編集部「ロマン大賞」係

★応募に関するくわしい要項は隔月刊誌Cobalt(1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売)をごらんください。

9784086004138

ISBN4-08-600413-5

C0193 ¥419E

1920193004199

定価本体419円十税



コバルト文庫